

292.593

Sy996c

# 錫崙島志

東京

弘教書院發行

洪岳釋宗演著

全

026769-000-6

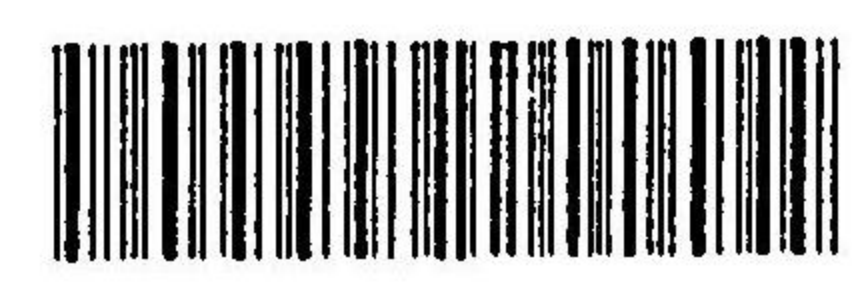
292.593-SY996c

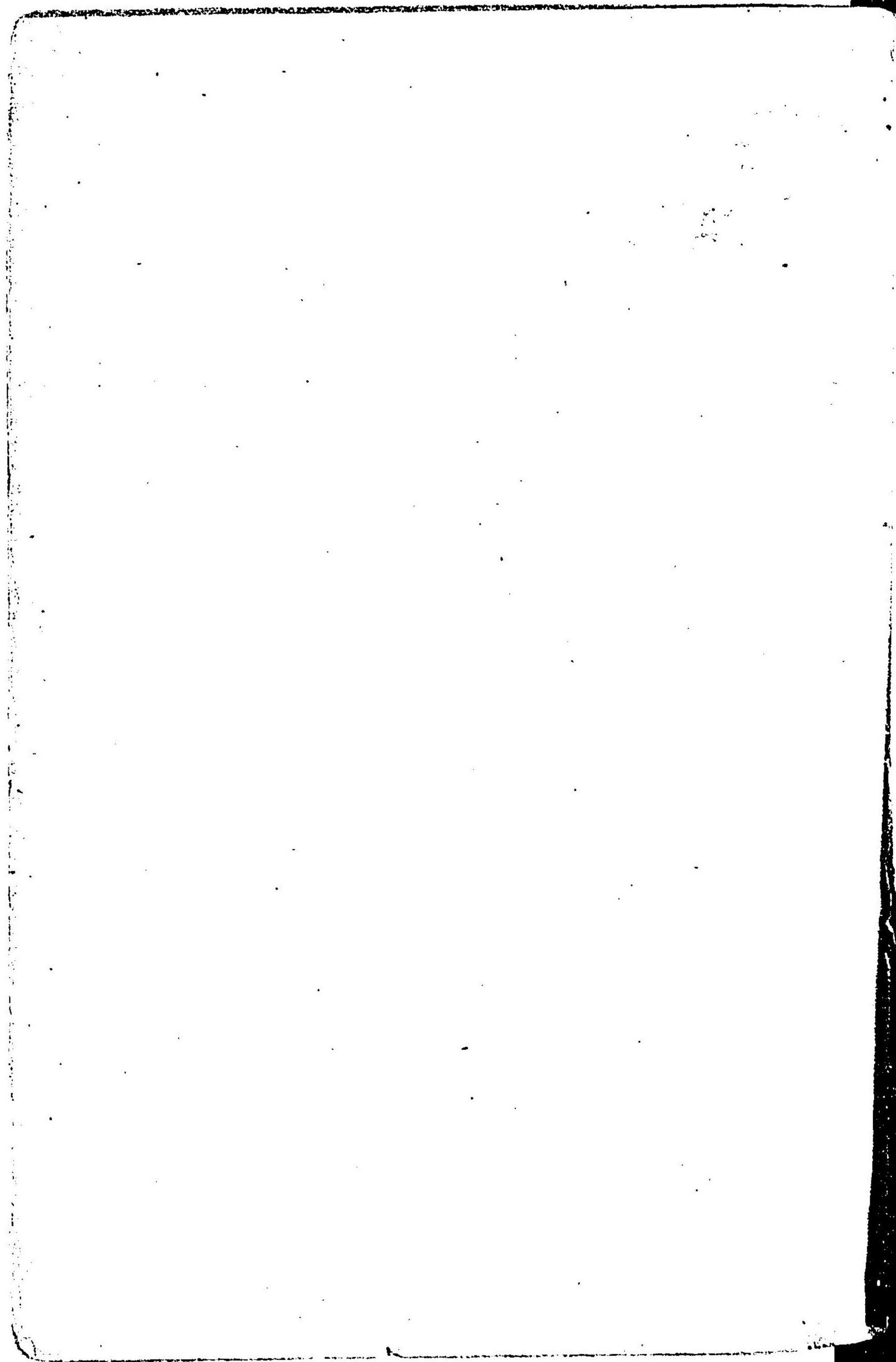
錫崙島志

宗演/著

M23

ADD-0469





洪岳釋宗演著

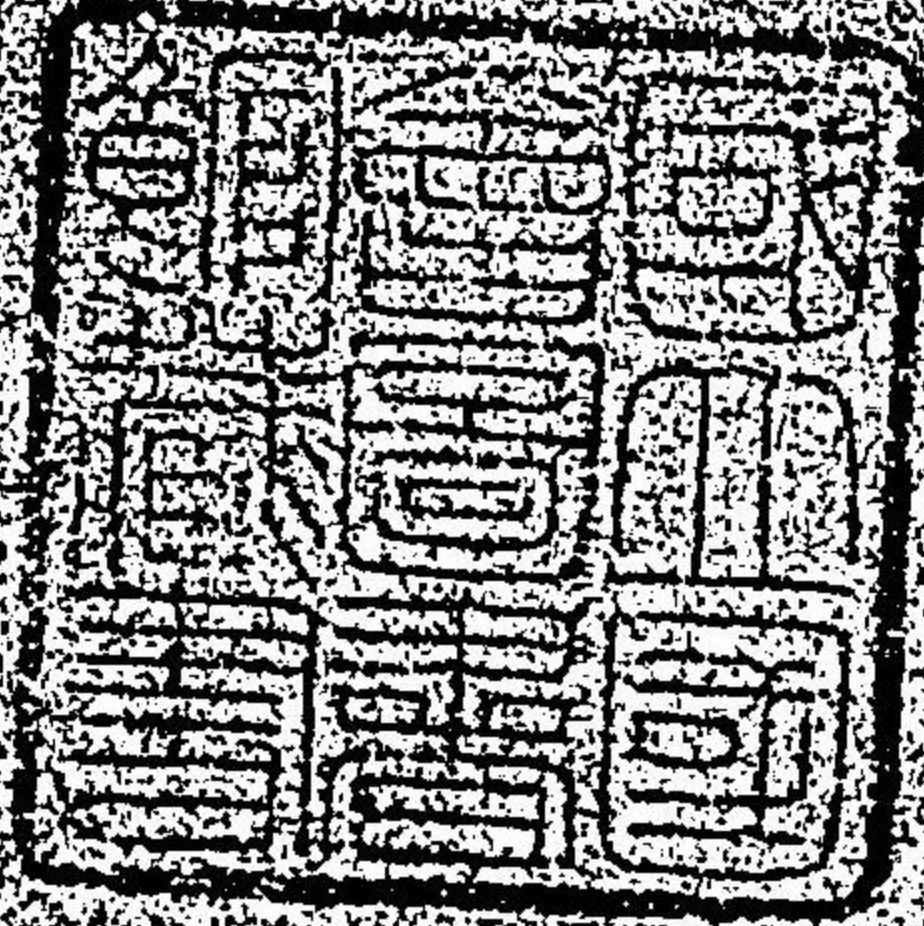
錫嶮島志  
全

東京

弘教書院發行

師

292.593  
Sy 996c



261919

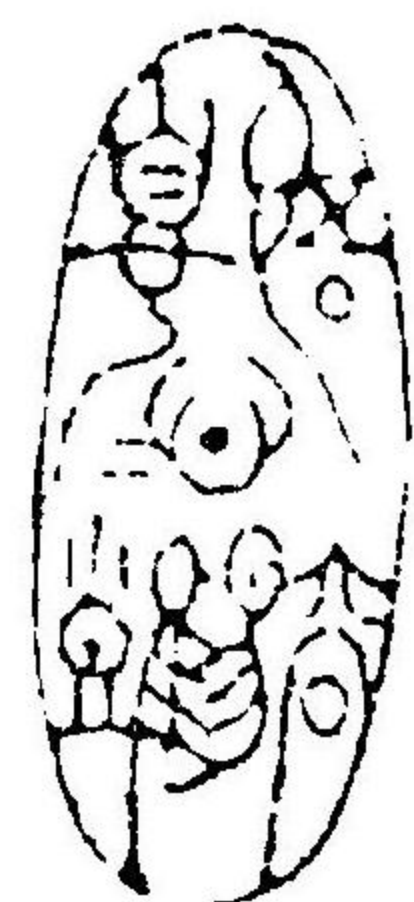
三州

子

志

洪嶽禪上人序

仁和許息安題



師子洲志序

昔東晉高僧法顯曾詣師子國謂國踞印度  
洋師子洲更有小洲百數圍繞其地恆出珍寶  
珠璣王城北有大塔高四十丈旁有大伽藍云  
具詳奉信今秋日率洪嶽禪上人從師子國游  
歷而來訪許居士於春申江上常懼及普陀慈  
菴洞濤同席瀾向上座從彼國到此計程若干  
各三千里許尚不涉程途一畝作麼道答待居

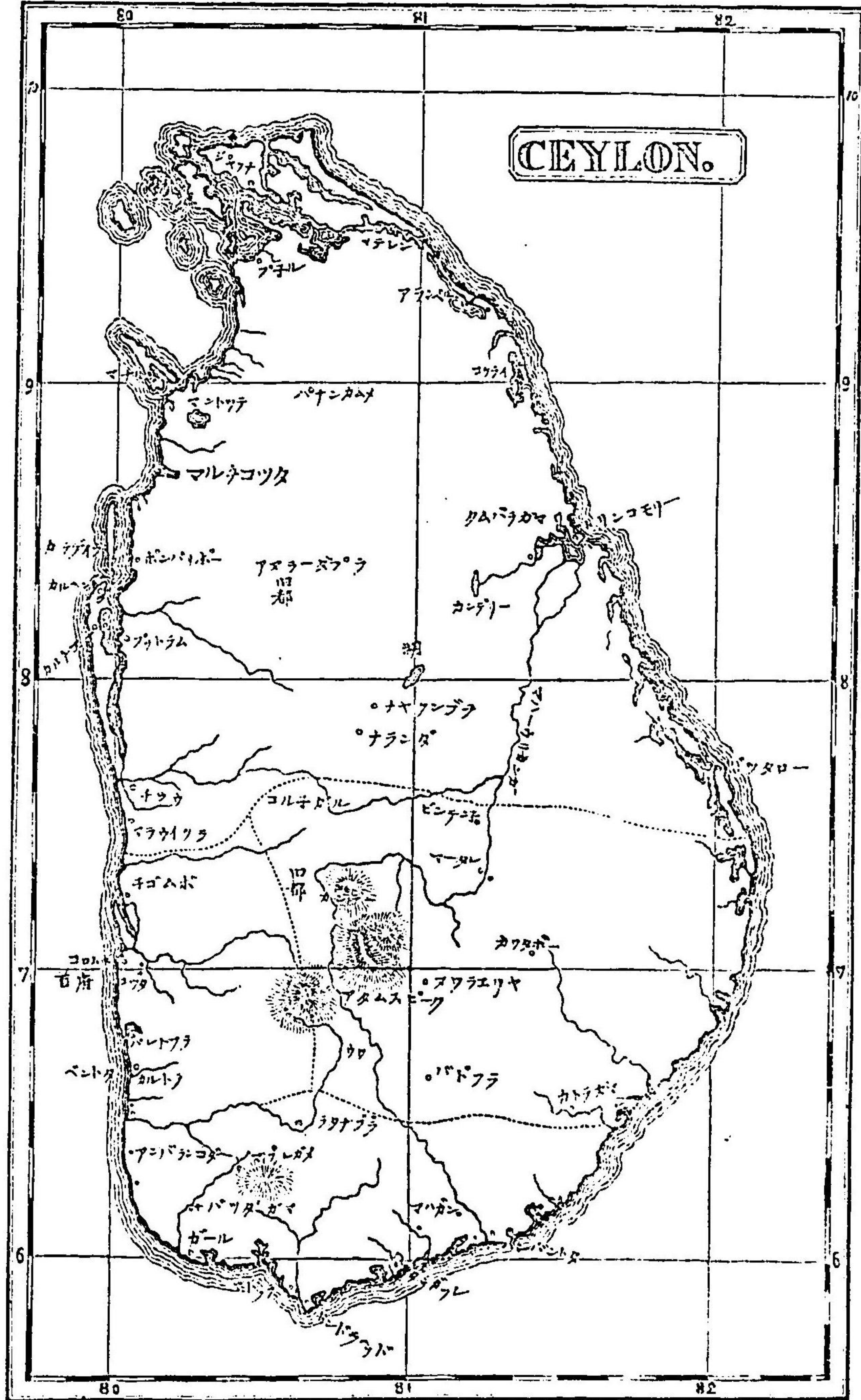
佛無所不有  
 佛無所不有  
 佛無所不有  
 佛無所不有  
 佛無所不有  
 佛無所不有  
 佛無所不有

佛  
 題

士一曰吸卷申江時再向道向申江即在目前  
 請上座吸筒樣我答喫茶去居士云果然作  
 家許又親到師子床爰出示師子滿志云晉  
 時所有塔與伽藍至今松存常懼不習和文惜  
 未能詳解要知山下路但向過來人相法顯古  
 德在常寐光中亦當印為托臂同行者謹序  
 光緒十五年己丑中秋節海鹽張常懼并書


張常懼

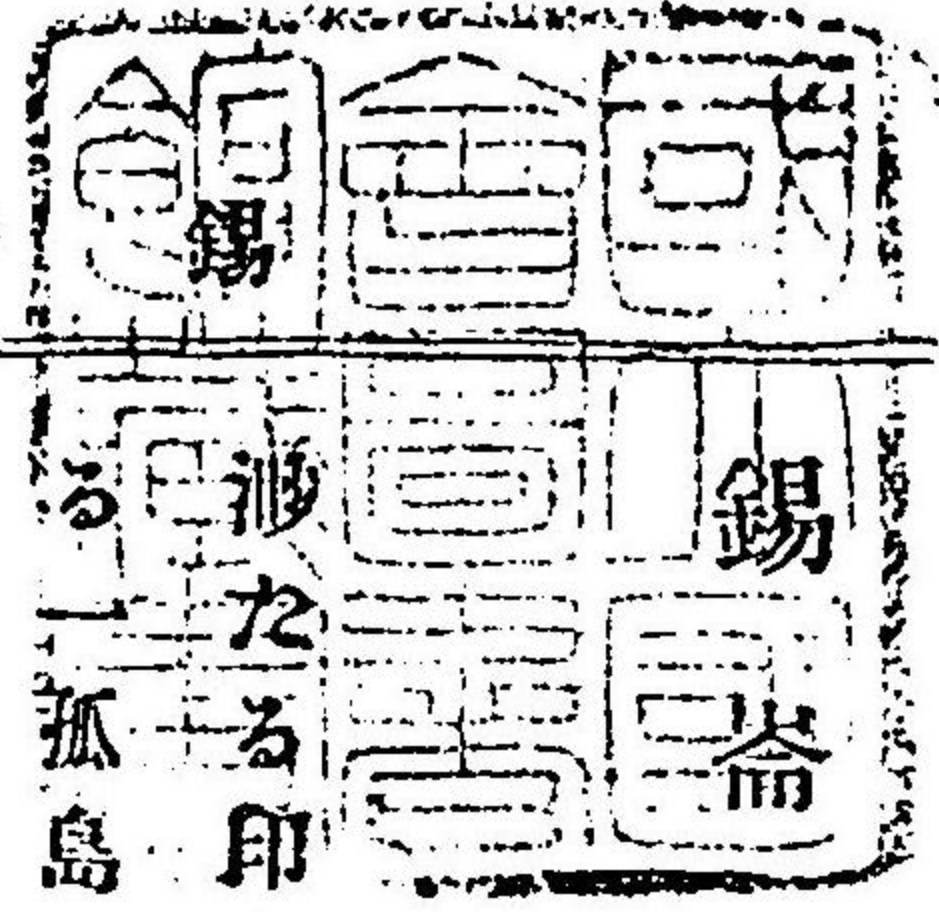




詠唱  
昔の昔年下宮尋  
昔の昔年下宮尋  
先法解發

淡路藏書





島 志

洪 嶽 釋 宗 演 稿

海たる印土洋ベンガル灣の西南マンタル峽の南東に横りて最爾よ  
る一孤島あり名けて錫嶺と云ふ其形恰かも一箇の芒果の如く東西横  
に一百卅七英里に亘り南北堅に二百七十一英里を窮む之を周行す  
バ七百六十英里と跨がり之を平方とすれば二萬四千五百英里に張る  
印土の大陸趣かに一葦の煙波を隔て六十英里の海程喚へば即ち應ふ  
駛舶晨に「マドラス」府を發して晚風直に錨を「コロンボ」港と投し瀛宙夕  
に「コロンボ」港と去りて九百英里の光月を「ボンペ」府に賞す凡そ歐亞  
の間を往還するは船舶として且く本島と寄港して炭水食糧を仰ぐ  
る者殆ど罕なり苟も意を商業と用ひ眼を運輸と注ぐ者ハ常々本嶋の

地位を以て胸中ニ記憶して可なり況や歐亞の間一朝事あるの日に臨  
 ての攻守兩ら此嶋ニ大なる關係を有すると問はずして知るべき也  
 抑も本嶋の古來種々の名稱ありて一を「タムバパンチー」と云ひ二を「シ  
 ーハラデーイーバ」と云ひ三を「ランカープラ」と云ふ乃ち「ランカー」の漢音  
 對譯の楞伽よして「プラ」といふ都府の義なり「シーハラ」或は「シンハラ」の漢  
 譯の獅子よして「デーイーバ」どの洲或は島の義なり「タムバパンチー」又の  
 「タプロバチー」の未だ古人の漢譯を見ずと雖本嶋古史中往々此名を以  
 て此嶋を呼ぶ又亞刺伯語に本嶋を指して「シランデーバ」と云ひ今英稱  
 之を「シェーロン」と云ふも皆な獅子洲の訛傳ありと云ふ有名なる英國  
 の詞宗「ハミルトン」氏云く錫崙の舊邦あり早く希臘羅馬は時世よ於て  
 「タプロバチー」の名稱を以て廣く歐洲の學者社會に知られたりと  
 本嶋上古の形勢に關して之を古への小説に筆し又今世の人口に膾炙

するの傳説太た鮮あらざと雖書契以前の事態多くの荒唐無稽に屬し  
 單に理想を以て稽ふ可らざる者あり然きとも茲より其最も事實に近  
 きものを擧て聊る本嶋上古の光景を示さんと欲す  
 印土古代の詩篇にして「ラーマーヤナ」と題する者の當時の詩人「バルミ  
 キ」の作にして是ぞ即ち本嶋の事蹟を題咏したる古詩あると云へり今  
 其詩工の概略を記述せんに西洋紀元前大凡二千年の頃に當りて北方  
 印土「オウダ」國の王「ラーマー」と稱する者あり此王の日種の王族にして  
 諸方を征討して廣大の版圖を擴め威名を遠近に轟かしけるが當時有  
 名ある美人「ミテラ」國王の女「スイータ」を娶りて寵愛無比「ラーマ」事に依  
 て父の爲め退れ久しく南方印土に住りて常々游渉を事とし妃を  
 携へて山水明媚の中に徘徊しけり時々獅子國王(即錫崙王「ラーワナ」あ  
 る者あり)爪かふ「スイータ」の嬌色を聆て戀慕禁すると能はず自ら衆を

率ゐて往いて之を奪ひ相ひ携へて當時錫崙の都府ある「ランカープラ」に歸れり於是か彼の「ラーマ」王大に怒りて急よ南方印土の蠻族を招いて陥すに利を以てし親から錫崙お赴き晝夜戦「ランカープラ」を圍むと十又二月にして辛ふじて彼の美妃「スイータ」と還へすと得たり是れ右の「ラーマ」ヤナ」てふ詩篇の工接あり然るに作者の専ら意匠の豪宕を愛し字句の雄麗と喜びて獅子國王「ラーワナ」を以て巨身の屬鬼に比し其幕下の猛卒を以て披毛戴角の貳貅に例し巧みよ「ラーワナ」の濠快擴逸の有様と形容して以て彼の婀娜たる「スイータ」妃の嫺雅なる態度は照應せしめ妙よ意匠を弄したりければ當時知覺力の單純なる凡民をして直ちに錫崙嶋の是を惡鬼夜叉の巢窟ありと想像せしめたる者と察せらる殊に知らず其所謂夜叉惡鬼なる者の殘忍尅勵なる當昔の蠻民なりしとを

又本嶋上古の史傳に憑るに昔し瞿曇釋迦牟尼佛在世の時に當て本嶋未だ人類の棲息するなく但し「ヤツカ」夜叉「ナーガ」龍神等の淵藪なりしと云ふ爾時世尊三たび本嶋に來臨して右の夜叉龍神を濟度し玉へり便ち第一回には「ピンテン子、マハーナーガ」花園ニ戻止し第二回には今の「コロンボ」港の近傍なる「カラ子」龍殿よ來降し第三回には今英稱「アマムス、ピーク」即ち本名「スリーパダ」山(神足嶺)に降臨せりと云ふ而して此「スリーパダ」山の本嶋有名の靈地にして山頂に佛足千幅輪の跡あり然れども年代深遠物換りり星移りて今の唯々足跡を蘚苔模糊の間に存するのみ

予因みふ東晋の高僧法顯師の自記遊天竺事を閱して左の數十言を得たり今茲に抄出して獅子洲即ち錫崙に係る事實の證左とす  
(前略)於是か商人の大舶よ載せられて海よ泛び西南行冬初の信風を得

たり晝夜十四日にして獅子國に到る(中畧)其國本と洲上に在り東西五十由延(梵)に一由延と云ひ凡そ英の十二里南北三十由延左右小洲乃ち數百あり其間相去ると或の十里二十里皆な大洲又統屬し多く珍寶珠璣を出し摩尼珠を出すどころあり地方十里可なり王人をして守護せしむ若し探者ある時の十分よ三を取る其國本と人民なし止た鬼神及び龍ありて之に居る諸國商人共よ市易す市易の時鬼神自ら身を現せず但々寶物を出して其價直を題す商人則ち價に依て物を取る商人來往して住するに因ての故よ諸國の人其土の樂きとを聞て悉く亦復た來る是に於て遂に大國を成す其國和適冬夏の異あし草木常よ茂り田種人に隨ふ時節あるとなし佛其國よ至りて惡龍を化せんと欲し神足力を以て一足王城の北を接し一足山頂を接す兩跡相去ると十五由延王城北の跡上よ於て大塔を起つ高さ四十丈金銀を以て莊校し衆寶を

以て合成す塔邊復た一僧伽藍を起して無畏山と名く五千僧あり云々以上法顯師が獅子國と云ひし者の即ち今の錫崙なると近代内外學者の共に許す所にして亦疑ふ可らざるが如し  
往時の全嶋を三大地方に野畫を曰く「ピヒタ」地方曰く「マヤ」地方曰く「ムナ」地方是なり近代復た之を區割して七州とあす曰く西州曰く南州曰く東州曰く北州曰く北西州曰く中央州曰く中央北州是なり而して嶋中北方の地方の一面平坦にして沃壤相ひ連り漸々内部よ入るに隨て峻嶺重疊して地骨稜確たり氣候亦齊しからず便ち中央山部の地方にして「ヌワラエリヤ」の如きは常時輕冬の薄寒なるにも拘へらず南方の海濱に面する「コロソ」港の如きは不斷夏天の盛暑なり概して本嶋の氣候を評すれば周歲大ある寒煖の變化なく旱潤節に合して風雨人よ可きり鬱蒼たる椰林影を交へて天然の涼蓋を作り頼如たる芳草野

よ連りて無工の青甕を舗く短袴輕衫身邊瀟洒頭に冠せず足よ襪せず  
 掬して飲むべく既して歩すべし若し唯た生活の簡易にして家事の淡  
 泊なるを云と、本嶋は熱帶圈内の小桃源と謂ふ可き乎  
 嶋中最高の名山を「ピデユルタラガラ」と云ふ海面より直立すると八千  
 二百九十五尺突兀として「ワラエリヤ」の半穹に聳ゆ島中第一の大河  
 を「マハーウイリガンガ」と稱す北東一百三十五英里を走りて直に「トリ  
 シンヨマリ」峽に瀉く其他鍾秀藏靈の名山大川頗りしく茲に枚擧する  
 お違あらず

嶋中氣候和暢なるが故に各種の動物善く繁殖し地質膏腴なるが故に  
 一切の植物亦能く發育す即ち動物よ象、豹、熊、猴、鹿、牡牛、水牛、山羊、等  
 り即ち植物よ稲米、椰子、珈琲、茶、肉桂、檳榔、甘蔗、芭蕉、芒果、橙橘、鳳梨、莖、等  
 此曠料に供すべき者より烏木、檀木、八絲木、多羅木、香水等の建築或の器

具に須ゆべき良材あり加之本嶋の地盤と全く「ナイズ」と稱する堅石よ  
 り組成せらるるを以て隨て礦物の産出に乏しむるす即ち碧玉、紅玉、  
 吠琉璃、摩尼等の本嶋著名の産物にして又黒鐵、黒鉛、灰粉石の類も多量  
 の産出ありと云ふ其他嶋中羽族甲殻の珍奇ある者擧て數ふ可らず中  
 よ就き南方海濱の班鳩北地沿海の眞珠及鼈甲等の尤も價直ある産物  
 ありと云べし  
 若し夫れ一國經濟の程度を知らんと欲せば先づ其國輸出入物産の多  
 寡を調査せんを要す便ち近年本嶋よ於て輸出入品の價額其最高點  
 に達せし一年度の統計を表すれ左の如し

輸出部

物品

價額

珈琲

二、四三〇、〇〇〇(バンド)

志 島 崙 錫 (十)

椰酒并油	三二〇、〇〇〇(パウンド)
荳	七二、〇〇〇(全)
肉桂	六八、〇〇〇(全)
黒鉛	六二、〇〇〇(全)
檳榔	六二、〇〇〇(全)
總計	三、一五〇、〇〇〇(全)
右の物産にして椰子酒、檳榔、荳等は、印度内地へ輸出し其他の物品は大抵英國へ輸出す	
物品	輸入部
穀物	一、五七〇、〇〇〇(パウンド)
綿布	九〇〇、〇〇〇(全)
價額	

(十一) 志 島 崙 錫

石炭	二〇〇、〇〇〇(パウンド)
葡萄酒類	二五〇、〇〇〇(全)
馬并家畜類	一一七、〇〇〇(全)
魚物	七八、〇〇〇(全)
肥料	六五、〇〇〇(全)
雜貨	六四、〇〇〇(全)
金属	六二、九〇〇(全)
糠類	五三、〇〇〇(全)
金銀貨幣	八八五、〇〇〇(全)
總計	四、八〇〇、〇〇〇(全)

右の物品にして綿類、石炭、酒類、段物、利器、玻璃、陶器、書籍等の雜貨之英國より輸入し、穀物、家畜、布、俵、干物、砂糖等ハ印度より輸入し鹽魚、裸麥はマ

ルデブ[嶋より輸入し緑茶の支那より輸入す  
本嶋の中央政府の現今「コロンボ」に於て設立し政府の立法、行政、司法の  
三部を以て之を組織し而して知事英皇の命令を奉して之が統轄の主  
權を有す行政部の五名は參事官其他の有司より成立して知事其首坐  
を占め立法部の八名の議官(英人)六名の代議士(シンハリーズ并にタミ  
ルズ等の土人)より編成せられて知事其議會の招集開閉を命ず司法部  
の行政以外に獨立して高等法院、地方法庭、市區裁判所等の設けあり又  
其地方政廳ある者の各々正副の理事官を以て之を統へ「モダリアル」之  
を輔く「モダリアル」に入る時の書記官の如く出る時の通辨官も似たり  
而して知事及理事官の固より英國出身の人を限りて其職に補せられ  
「モダリアル」の「シンハリーズ」并に「タミルズ」の土豪其職務に服事す之を  
要するに公私は論なく都て第一流の地位を占むる者の英人にして他

の各人種之が属隸たるに過ぎず是本嶋爲政の大畧なり  
抑も一國より一國相應の風俗人情政治宗教等之ありて幾多の年代を  
經過し種々の沿革を歴盡して今日を推し移り來りし者なれば是れ即  
ち其國の活歴史にして春秋の筆法を假らず太史の直言を要せず自ら  
其國の形勢風土より由て天然の發達をみし自ら其國の體性遺傳に伴ひ  
て法爾として進化し又退歩し活氣一點流行發動して須臾も止むと  
なきの狀恰かも一箇の寒暖計の如し一國民人の智徳品位其最冷度より  
止まる者之を野蠻と云ひ稍々其温度を昇る者之を半開と云ひ最も其  
熱度に達したる者之を文明と云ふ其消長伸縮の機循環無端の妙天下  
の哲學者をして寒窓青燈の下に沈吟せしめ世界の理窟家をして驢前  
馬後に瞠若たらしむ誰れか之を造物者の無盡藏と云ふ社會進化の大  
法應に是の如くならざる可らず



今左よ本島現在の人種并に風俗人情等を縷述して先きよ所謂一點の活氣が如何よ過去よ於て流行し亦如何に現在に發動しつゝある乎を示さんと欲す

夫を本島の亞細亞大洲に屬する一粟島たるよ過さず而して其人口の無慮二百七十五萬六千六百十八人許ありと斯る僅少の人口あるにも拘りらず其人種の複雑なる真よ驚く可堪へたる者あり隨て風俗人情等皆各々趣向を異にし途轍を同ふせざるの亦た一種の奇觀ありと云ふべし

今純粹の歐洲白哲人種を除きて英政府より一般よ錫嶺の住民と総稱する者のみよ分ちて凡ろ九種の人種とす第一「シンハリーズ」第二「タミルズ」第三「ホルトグス」第四「ダユナ」第五「マレーズ」第六「チャフルズ」第七「イアルメン」第八「ウエツダ」第九「ロディアス」是なり

第一「シンハリーズ」は是即ち本島固着の人種にして其數亡慮百八十四萬六千六百十四人あり右の九種族中に於て最も多數を占むる者の此「シンハリーズ」なりとす此人種の一般よ温厚着實の性質を具へ能く文學を好み禮儀と重んずるの風采あると同時に又動もすれば因循姑息よ流るゝの弊あり若し夫れ冒険敢爲利を征し貨を搜り産を積み業を創むる等活潑の所爲の此人種の最も難とする所よして茅屋三間環堵洒落居に長物を畜へて一狐裘三十年自ら足るとを知ると云ふが如き境遇に安んずるの是れ「シンハリーズ」人種の特性よして若し天下一簞一瓢脰を曲げて高臥し恬然貧窶を甘んずる者を許して苟も賢也とせば百八十四萬六千六百十四人の「シンハリーズ」の箇々大賢人々亞聖あるべしと雖ども世の常よ堯舜の世よあらず人心物と凝滯せず世道時を逐ひて推し移る無爲よして化するの時代疾くよ去り攻伐を以て賢

なりとするの氣運亦た將に陳套に属せんとし實利實業の快風蕩々と  
して俗世界を鼓動し優揚劣抑の騷雨霽霈として眞凡夫の頭に漲ぐ時  
光是れ黄金黄金即ち權利是故に今の世も處して一人分上の功を立て  
已を利し又人を利せんと欲する者の須く百折不撓の精神を奮ひ機に  
臨み變に應じ多々益々事と辨するの能力あるべしある可らず凡そ近  
代印土諸邦が相踵て泰西各國の属隸を歸したる者外に呑噬搏撃飽  
くとを知らざるの貪民ありて之を横奪したるに因ると雖ども亦た内  
に懶惰固陋偷安苟且等各種の腐敗物ありて臭氣外に向て洩漏し以て  
蒼蠅の利嘴を招きたるに外あらず予「シンハリーズ」の風俗を述べんと  
欲して忽ち慨する所あり茲に一言を挿むの已む可らざるも際せり  
「シンハリーズ」の容貌の骨格逞しくして身幹峙ち峻鼻潤目髪長く鬚濃  
かに皮膚銅色音吐爽快男女共よ束髪なれども男子の頂門に籠甲の櫛

を戴く櫛の形の緊絃の弓の如く遙かに之を前面より望む時ハ宛かも  
角と戴く動物の嶄然として卓立するが如し女子の概して豊面平鼻眼  
圓かよ口坦あり老幼共に金属の針を以て結髪を嵌す一般「シンハリ  
ーズ」の衣服の身に白色の短表衣を着し腰より以下は彩紋の襪衫を纏ふ  
男女共に大なる粧飾の別あり  
「シンハリーズ」古代の禮服と稱する者の其製裁太た古雅にして愛す可  
き者少からずと雖ども今煩のしく茲も掲げず而して方今「シンハリ  
ーズ」中等以上人民の服制の半ば土風を存し半ば洋式を交り斑々たる容  
貌一見して其属國民人たるを窺ふべし  
又其細民勞役者に至りてハ大抵半身裸形にして唯綿布の一反を以て  
腰部以下を覆ふ其狀粗野なりと雖ども熱國の天福なる敢て之が爲め  
よ身軀の健康を傷らす

思ふに吾朝古來美術の一端として世に稱揚せらるる佛陀菩薩などの彫像或は繪畫なる者の多く印土諸邦古代の人物風采を摹倣せしものならんと察せらる當時其尤も妙手を以て人口に噴々よりし行基運慶等の諸大家がものせし所の諸天善神などの形像は印土各國帝王の寫眞として巨勢金岡兆殿司等の雄筆を揮て描出せし文殊普賢などの繪畫の蓋し印土古代の貴公子令嬢の撮影なるや疑ひなし梵僧の脱塵清楚なる容儀の五百阿羅漢の圖書は出現し奴隸の強猛辛辣ある面目の二王不動等の剛尅に類似せり一見人をして之を敬せしめ之を愛せしめ且つ恐を且つ慎しましむ佛法の元より偶像宗にあらざれども又美術的の意匠を以て佛事を營むとをも妨げず彼の他教の刀劍を提げて宗旨を弘め腥血を流して教義を賣るが如き不祥の運動を成したる者と日と同ふして語る可らず是故に佛畫佛工の舊に國家の美術を進

歩せしめたるに與りて方あるのみならず亦洵に天下の歴史を補足しざる者と稱して可なり若し人印土古今の人物風采を詳細に調査し來て之を吾朝の佛畫佛工と對考したらんや當時吾國は美術の何れ程の進歩をなしたりしか當時印土の文明は如何ん佛教と美術の關係の如何ん等思ひ半ばは過ぐるの知覺あるべしと信ずる也  
「シンハリーズ」に古來より世襲家讓の爵位ありて儀式待遇太だ嚴重ありし蓋し英政府が現今と雖ども此人種の尊號を喜び溢稱を貴人の風と投して依然として其舊制を「シンハリーズ」の間に慣用せしめ以て民人の歡心を傷けざるの亦施治の方便その宜きを得たる者と云て可ならんや英國は屬地政略に此般のと多し試み左に「シンハリーズ」の舊爵等級を掲ぐ

山部豪族の爵號

第一「アディガル」第二「ガジヤナーヤカ」第三「ジサーワ」第四「モホツタル」第五「バスナーヤカ」第六「レーカンマハットマヤ」第七「ラテーマハットマヤ」第八「コーラーラ」第九「カンガナマ」第十「ガマラーラ」

海部豪族は爵號

第一「マハイモダリアル」第二「モダリアル」第三「モホツタル」第四「モハンシラム」第五「アーラツチ」第六「ウイダーナ」

以上兩部の爵位中共に第一第二の者の舊國の參政大臣家にして以下皆之に次で職掌相異あり威權隨て全からず然れども今の只名ありて實亦く嶋民愧を忍びて英國に屈從す

加之此人種にも復々印土人と同じく古來所謂「カスト」なる一種の族姓ありて門地ふ由りて人品を分ち種性も憑て公權を與奪そ古來今此「カスト」の凌轢殆ど其弊に堪へざる者あり國民の氣脈を壅塞し同胞の團

躰を離間する職として「カスト」の習弊に由らずんばあらず「カスト」を以て告訴し「カスト」を以て諍鬪す婚冠慶吊より問候往來に至るまで皆此「カスト」の高下も依て避就を定め向背を決す其上種「カスト」者より下種「カスト」者を視ると糞土の如くなるを以て下種姓者より上種姓者を見るときも亦猶仇讐も異ならず英政府現も其法を廢棄したりと雖も因襲成風の尙しき今尙「カスト」の爭論太だ熾あり然るも本嶋は是れ由來天下も隠れなき佛法隆昌の古國にして法主釋迦牟尼其人は印土の帝種より起て而かも其富貴榮耀を觀ると獎莖の如く捨て去て道に入り其法幢を五天に懸へその日に當て先づ四姓平等の説を唱へ慈悲を主義とし喜捨を標準として人間固有の智慧徳性を發達せしめたる大聖にあらずや苟も其遺法の恩徳を荷負する所の「シンハリーズ」にして未だ「カスト」の頑眠を警覺せざるは常に吾儕の遺憾とする所なり

聞く本嶋佛教中或る一派に於て「ゴイガマ」と稱する上種姓出の者に  
 わらざるに敢て出家得度せしめずと苟も瞿曇氏の眞子と稱して其先  
 烈の本志に率負して俗情を滯累せらるゝ一に那ぞ茲に至るや予曾て  
 怪みて之を某派の一高僧に質す僧曰く是本島先王の欽定なるが故に  
 背く可らざる也と嗟呼一方の高僧にして何ぞ俗を貴みて眞と卑んず  
 るの茲に至るや佛法今日の蒙塵蓋し訝るゝ足らざる也  
 今單に「シンハリーズ」に属する「カスト」のみを擇みて大略二十一種の各  
 別ある名目を得たり便ち左に列擧す

- 第一「ゴイガマ」(豪農紳商)第二「カラウオ」(漁業者)第三「ドラウオ」(造酒
- 者)第四「バダロー」(打金者)第五「アツチャリョ」(打鐵者)第六「ロークルウオ
- 」(打銅者)第七「ハリョ」(剝桂者)第八「ラダウオ」(洗衣者)第九「パニツキ
- ョ」(理髮者)第十「バダハリョ」(陶器者)第十一「ベラワリョ」(箔匠)第十二

- 「ネカチョ」(賣卜者)第十三「ハクロー」(造糖者)第十四「フンノ」(泥匠)第十五
- 「パンナョ」(掃芥者)第十六「パドウオ」(昇橋者)第十七「ヒンナウオ」(役夫
- ノ洗衣者)第十八「オリョ」(最賤の洗衣者)第十九「ガハラョ」(屠畜者)第二
- 十「キンナロー」(織蓆者)第二十一「ロデオ」(追放人)

以上揚ぐる所の者の所謂「シンハリーズ」の「カスト」と大別せし者なるが  
 大凡そ天下何れの世にか門地ありらん何れの邦に種姓あからん種  
 姓の人間の血統あり門地の祖先の遺物あり人民繁殖するの邦の種  
 姓頗る多く功閥競進の世の門地大に分る若し世界美術的の眼を以  
 て人間の境遇を洞觀する時の門地あり種姓なり貴賤尊卑の差別なく  
 皆咸く天然の模様人間の文彩にして異種異姓相聚りて始て國家の跡  
 相と圓成する者なれば門地種姓の多きの當り國家の妨害たらざるの  
 みならず或の社會の美觀として毫も妨げなき者の如し是宛も白蓮の

淤泥より出て而して自ら君子に黃菊の霜雪を凌いで而して自ら隱逸  
 又牡丹の艶陽を媚ひて而して自ら富貴を野花の野趣ある芳草の芳氣  
 ある妍蚩相映し異觀眞を恣にして同じく天地の一大化育を大成する  
 が如し今の本島の「カスト」は於けるも亦然り若し彼の二十一種の「カス  
 ト」をして各々對等均一の權利と義務とを享有せしめ和敬親愛圓滑に  
 輕快に交通共濟の道を講しよらんには是を寔に島民の安寧幸福なる  
 と云ふべけれども奈何せん本島の「カスト」なる者の其習染の由て來る  
 と遠く遂に一種の社會壓制となり種族を以て職業と限り職業に因て  
 人品を輕重するに至り此一種相惡むの情感の一轉して怒雨となり再  
 轉して嫉風となり轉々相軋りて忽ち群芳并發の美景を抹殺して落花  
 狼籍の荒涼を呈出するも到る於是の所謂「カスト」なる者の野蠻時代の  
 遺物として世に擯斥せらるゝも復た已むと得ざる次第なりと云べし」

元來印土は於て四姓の「カスト」あり曰く婆羅門曰く刹帝利曰く吠舍曰  
 く須陀是なり此四姓のとい麻奴布羅那等の諸書に散見して中より頗  
 る奇怪なる傳説あり即ち婆羅門の最初婆羅門神の口より化生し刹帝  
 利の神の手より化生し吠舍の神の股より化生し須陀の神の足より化  
 生す出所の相異なるは是れ貴賤の由て分るゝ所即ち婆羅門ハ其身生れ  
 ながらおして神聖に近く常に宗教の秘奧を解して神命の稟承を主と  
 り世人の行爲を指示するが故に是を第一の種姓となし且つ僧種と呼  
 ぶ刹帝利ハ武事を掌りて國家を保護するが故に之を第二の種姓とな  
 し且つ武種或ハ王族と稱す吠舍ハ紳商醫師狀師等を總稱して之を第  
 三の種姓となし且つ商種と稱す須陀ハ農民工夫百般の力役者を總稱  
 して之を第四の種姓となし且つ農工種と稱す或る説は從へば第一第  
 二第三の種族ハ高等なる「アリアン」人種にして第四の種族のみハ印土

太古の土人あらんと云へり此外數種の賤種あり屠者革匠等皆な之に屬す  
 以上四姓の種族の古來より彼此互に嫁娶することを許さず若し異姓相  
 ひ結婚する時の其子弟の父母の種姓に屬することを得ずして降て劣等  
 の種族とあらざるとを得ずと云ふ  
 抑も印土は西洋紀元前五百十八年の頃に於て波斯の王「ダライアス」の  
 侵攻を被り又同三百二十七年に及んで希臘「マセドニア」の王「アレキサ  
 ンデル」の併呑に遭ひ後ち又西暦六百二十二年の頃亞刺伯に回々教起  
 りて其教の説法を代るる刀劍を以てし其狂猛當る可らず遂に同七百  
 十一年頃より同一千餘年に至るまで全印土の盡く回教徒の爲めに蹂  
 躪せられ人民塗炭の苦に沈めり是より以降「モゴル」兵屢々來寇して殺  
 傷劫掠を恣まるとし同千三百九十八年「サマルカンド」の王「テイムル」即

ち元主帖木爾大兵を率ゐ來て首府「デリ」を陥れ自ら印土皇帝の位に即  
 けり同千五百二十年前後於て「ペーブル」王「帖木爾」の親族「カブル」より  
 入て又印土皇帝の位を襲き「モゴル」朝茲に起る是より先き西歴千四百  
 九十七年の頃なりけん葡國人「ガーマ」なる者始て南印度に來て漸く侵  
 略を肇め同千五百九十八年阿蘭人亦來て陽に通商と名とし陰に奪  
 略を行ふ更に同千六百年の頃よりして英人來り佛人臻る皆各々狼貪  
 を試みんとする者なり降て同千七百七十三年英の總督「ソルレン、ヘイ  
 スチング」氏來て大に兼併政略を行ひ便ち同千八百五十八年に於て英  
 の女皇「ビクトリア」即ち現英皇遂に印土女帝の尊號を稱するに逮べり  
 嗚呼印土の二千年間外來の奸雄驍將が野心を満たす試験場となり二  
 億幾千萬の人民の生かから叫喚地獄の幽鬼となり了れり如是の慘毒  
 之を天運と云ふも非也人爲と云ふも非也是他なし所謂印土の「カスト」

ある者首として之が大禍因たらずんば非す四姓の軋轢一國の結合を欠きたるに坐せずんば非す看よ彼の回教徒が印土を攻略するに當て謀を外に泄らし欺を敵に納き内應密援恒ふ賊の爲は梯を過しざる者の舊來賤民卑種として他の種姓より輕蔑せられたる須陀以下の卑族あり現今印土に於て回教の勢力尙を強大なりと云も亦彼の卑種族の回教と奇貨として遺恨を他の貴種族に報するは外ならず予常に謂ふ印土を亡滅せしめたる者の敵國外寇に非ず寧ろ印土其國の「カスト」是なりと其他數多の原因ありて之は附隨すと雖要するに種姓軋轢の反動たるに過ぎず本島の如きも亦其餘弊に感染せられたる者なるべし」夫れ「シンハリーズ」王統の始祖を「ウイジャイヨ」大王と稱す而して此王の父系の當時「ウオング」今の「ヘンガル」の貴胃にして其母系の「カリンガ」今の「マドラス」の北西の王種なり便ち「ウイジャイヨ」大王の祖母の

時の一小吏「シンハ」獅子の義なる者と密に相通して大王の眞父なる「シンハバフ」王と産めり然るは本島の古史中彼の「シンハ」なる者を以て正しく眞箇の獸類獅子の如く巧みに小説を作りて人類と獅子と相交りて懐胎したるが故に其所生の子を「シンハバフ」と名け又其血統の流れを汲む種族と「シンハリーズ」或は「シンバラジャイテ」(獅裔ノ義)と呼び即ち又本嶋を指して「シンハラ、テ」(獅子國)と稱すと云ふ

「シンハバフ」王は是れ當時の明主にして爾時「マーガタ」(即摩訶陀國)に接する所の「ラーラ」國に君臨して都を「シンハプラ」と號し遠近其治績を頌したり時に「シンハバフ」王の太子(後ち本島の第一世「ウイジャイヨ」王)とある資性慍悍にして武を嗜み稍長するに及びて豪驕自ら喜び四方浪落の士を招き天下無賴の徒と交り放縱不羈慢りに殺戮と好む人之を諫むきとも聽かず父王怒て「ウイジャイヨ」并に朋黨五百人を捕



へて之を流罪に處しけり「ウイジャイヨ」忍ち其適從する所を失ひ五百の朋黨と共に海を浮びて運命を一輩の漂流する所に委ねたりしが海上數多の艱酸を嘗めたるの後ち圖らずも今の錫崙島を發見して「クムババンチ」の地(今の「ブッタラム」)に上陸するを得たり實は是れ西洋紀元前五百四十三年あり本島の古史に「ウイジャイヨ」大王の上陸の當さに釋迦牟尼佛が入涅槃の日に符合すと云ふ果して然るにや「ウイジャイヨ」大王の上陸の後幾もかく當時本島酋長の女「クウヘー」ニ(小説に「鬼神の女あり」と云へり)ある者を納れて妻とせり是より先き此曉猶なる「ウイジャイヨ」は以謂らく好箇の孤島土沃にして地饒かち我れ彼の酋長を代て取て以て我が志す所を爲さん而して之を成すの先つ彼の酋長を除くに如くすと私か謀を「クウヘー」ニ通す「クウヘー」ニ素より「ウイジャイヨ」に意あり直に喜んて之を諾す因て

酋長を騙かして其女「クウヘー」ニを娶るとを約し遂に日を卜して女と婚儀を行ふの祝筵を於て預め兵を伏し酒酣なるに乗して突然酋長を弑して自ら奪て遂に本島の主宰となるを得たり後ち「ウイジャイヨ」に全く本島を統一して都を「タマナヌワラ」に建て自ら王號を稱する及びて改めて南印土「パンダヤ」國王の女を娶り立てし后妃となし先妻「クウヘー」ニ并ぶ其腹出の子女を併せて之を當時鬼蜮の巢窟と聞えたる「ランカープラ」の僻幽に追放せり而して彼の不孝媚嫉なる「クウヘー」の路に於て蠻賊に要殺せられたるを唯其子女のみ遁れて其終ふる所を詳りにせずと云ふ(後段「ウヘッド」の章を參觀すべし)

「シンハリーズ」の古來何等の宗教を信奉せしかと原ぬるを釋尊在世中三回の來化ありしと云ふにも拘はらず西洋紀元前三百年代(即佛滅後二百年代)に至るまで本島の全く婆羅門教と奉せしとの史を徴して疑

ふ可くもあらず爾後本島第八世の王「デーワーナンピヤチツサ」始て佛  
教に改宗し大に之を宣闡せり今略して其佛教傳來の沿革を述べんに  
當時「ジャンブデーバ」(即閻浮提洲土人印土を呼ぶの稱「マーガマ」即摩訶  
陀亦云毘訶羅)の王「マンマアソカ」(即阿輸迦亦云「阿育無憂の義也」)恩  
威并ひ行ひて遠近悦服し大に版圖を擴めて國疆に無數の石柱と建つ  
此王深く佛教を歸して之を國教とあして用ひ政道を改革し賞罰を公  
明よし加之國中に療病院を設け救濟所を建て道路橋梁公園義井凡そ  
民人の便利快樂とする所の事物咸く之を起こし只其周ねのらさらん  
とを恐る釋尊滅後印土に於て佛法王法の盛なると此時を最なりとす  
學士「ハウンタル」氏云へるとあり曰く阿育王の佛教は大功徳を奏し  
たるの猶を公斯坦丁帝が西教に心力を盡したるの偉勳と好一對あり  
と至當の言と云べし

於是「デーワーナンピヤチツサ」王香かよ中印土佛教の盛化を聆き茲に  
四人の公使を撰みて腆く幣帛を齎らしめ遠く之を「ジャンブデーバ」  
遣て阿育王に就き佛教を敬請せんことを乞ひしめたり時又阿育王使を  
見て大に其遠來と勞とし首府「パトリプッタ」(波叱梨那城)に於て公  
使の一行を饗待して快く彼れが請願に應せり乃ち公使等島王の使命  
と果して「マーガマ」を辞するに臨み阿育王の酬ゆるに王冠寶刀洹河の  
神水等を以てし且つ王子「マヒンダラ」尊者(大帝尊者亦云摩訶因陀羅尊  
者)を差して本島弘教の大導師となし之を佩らしむるは佛牙の真舍利  
と以てして特に之を「デーワーナンピヤチツサ」王に薦めしめ且つ答へ  
しめて曰く承り聴く佛法の王公大人有力の檀越お附囑すと宜しく阿  
耨多羅三藐三菩提漢譯「無上正等正徧智覺」を護持して同く共み其慶を  
依るへしと也是れ實に佛滅後二百三十七年即ち西洋紀元前三百六年

のとまりとす

「マヒンダラ」尊者始て本島に至るに及びて「デーワローナンピヤナツサ」王厚く之を崇敬し親から弟子と稱して銳意佛教の弘布を輔けたりしも先入の婆羅門教徒の種々の妨害を與へて佛教の傳播を遮りたりと云ふ「マヒンダラ」師の勉強思ふ可きなり然る時王の后妃「アマラ」夫人なる者あり深く師の徳風を歸依し躬自ら宮嬪官女を將ゐて相ひ共々落飾して道尼となり弘法の爲めを斡旋せんことを以て「マヒンダラ」師に懇請せり然れども師敢て之を允さず且つ后妃に諭けて曰く我に一妹あり今得度して「サンガミッタ」(即僧伽密多)と號す篤く覺道を信じて而かも戒體純淨なり妃若し眞に佛弟子たらんと欲せば我か妹の妃か師敬たるお堪へんと於是后妃「アマラ」景慕の餘り使を中印土摩訶陀國に馳せて王尼「サンガミッタ」を敬請せり「サンガミッタ」使を接して事を父王「ア

「ソーカー」謀る王曰く是ある哉我佛の正法南漸して將さる大に獅子國に行かれん然れども吾れ棄きに人情の忍び難きを能く忍び法の爲め愛子「マヒンダラ」師を南溪の孤島に遣ひしてより海山相阻て音容接すると希也之を愁とす今亦情を汝に割いて遙くは秦越の懸別をささば老懷孤り悲み殘喘涙多きを奈何せんと尼對て云く父子の情眞に切なり嚴慈身に洽ねし然れども尼若し猶豫して行かすんば恐くは彼土正信の善女等空しく佛化を泄れ永く憾を千載に遺さん尼不肖ありと雖幸に受け難き人身と受け遭ひ難き佛法に逢ふ此行若し聊か佛恩を報するの分あらば敢て誓て法の爲めに喪身失命を避けずと王其壯志を憐みて遂に請ふ錫嶺に應ずるとを許す

「サンガミッタ」故國を發するに臨みて阿育王の彼の有名なる伽耶城正覺山前の菩提樹(釋尊此樹下に於て成道)一枝を採て尼に贈して祝して

曰く願くは吾佛の妙道此樹と共に増々繁興せんことをと

王尼[サンガミツタ]が始て本島に來化するや后妃[アマラ]夫人を首めとし貴女閨淑の雍髪して道に歸する者其數を知らず此に至て佛教順に勢力を増加せりと云へり抑も本島に於て始て福田を開拓し佛種を傳播せし者の専ら摩伽因陀羅師の力に因ると雖其栽培灌養の功の僧伽密多尼公の力亦た與りて其多きも居る尼公の如きの實も緇門の女丈夫と謂つべし而して當時[サンガミツタ]尼公の携へ來りし菩提樹の今尙[アマラーマプラ]州[マハーメーガ]花園も繁榮して二千餘歳の積翠を留め蔭涼永く子孫を覆ふ寔も所以ある哉且つ法顯傳に云く

其國の前王使を中國に遣ひして貝多樹子を取り佛殿の傍に於て之を種ゆ高さ二十丈あり其樹東南も傾く王倒れんとを恐るゝ故も八九圍の柱を以て樹を柱ふ樹柱ふる處に當て心生し遂に柱を穿て下も

地に入て根を成す大さ四圍ばかり云々(現在存する所の樹即ち是なり)抑も古來本島の[シンハリーズ]種族と[タミルズ]種族との二統を以て充たされ而して[シンハリーズ]の常も内より起り[タミルズ]の曾て外より入て一放一收互も所領を争ひ時も或は激烈ある戦端を開き火鐵を以て王位を授受し汗血も訴へて社稷を交換したるの事蹟問々之ありと雖要するに本島王室の正統の固より[シンハリーズ]に屬して但數朝[タミルズ]の横領篡奪を蒙りたるに過ぎず又全嶋の住民も[シンハリーズ]其多數と占むる者なれば[シンハリーズ]の風俗人情の即ち本嶋固有の風俗人情を代表する者と謂て大過なあるべし今此篇に於て首として[シンハリーズ]に關する事情を詳述するの之が爲の故なり

夫れ[シンハリーズ]も[タミルズ]も元來本島に同居するは人民ありと雖ども其風俗習慣の相ひ背ざると異も同日の談もあらず是蓋し出處の格別

なるも因るのみならず亦兩様宗教を異にして安心の大義道德の標準  
 と同ふせざるの致を所なりと知らるるシンハリーズの六抵佛教を奉じ  
 て現今其數百六十九万八千餘人あり  
 今茲に佛教と稱する者の波利語の所謂マハーヤーナマハヤナ譯云大乘大乘的の佛  
 教を云ふよあらずしてヒーナヤーナヒナヤナ譯云小乘小乘的の佛教と指す者なり  
 と知るべし小乘佛教の所依の何ぞや即ちテピタカテピタカ譯云三藏三藏是なり三  
 藏とは一よりのスツタンスツタン譯云修多羅修多羅二よりのアビマンマアビマンマ譯云毗達磨毗達磨三にのウイ  
 ナヤウイナヤ譯云毗那耶毗那耶而して修多羅此よりの法本と云ふ出世の善法言教の本なる  
 が故なり又ハ契經と翻す理の契ひ機に契ふが故あり即ち小乘の經典  
 との所謂チャツニカーヤチャツニカーヤ譯云四阿含四阿含無比法之義也一にのアン  
 グツタラニカーヤグツタラニカーヤ譯云增一阿含增一阿含是にの人天の因果を明かす二よりのマ  
 ッデマニカーヤマッデマニカーヤ譯云中阿含中阿含是よりの眞寂の深義を明かす三にのサンユ

ツタニカーヤツタニカーヤ譯云雜阿含雜阿含是にの諸禪定を明す四にのディীগニカー  
 ヤディীগニカーヤ譯云長阿含長阿含是にの四諦を談し及ひ外道を破る此外にクツダカニカ  
 ーヤクツダカニカーヤ譯云小阿含小阿含なるものあり之を加へて五阿含とす是れ釋尊十二年  
 間ミガダーヨミガダーヨ譯云鹿野園鹿野園に在て横説堅説する所あり次に阿毘達磨  
 此には無比法と云ふ聖人の智慧法義を分別すると比ふ可らざるが故  
 あり亦單に論と翻す即ち俱舍俱舍譯云藏藏婆沙婆沙譯云廣説廣説等の諸論なり次に  
 毘那耶此よりの其功能を從て滅と云ふ作と無作との戒法を能く身口の  
 諸惡を滅するが故なり亦正しく律と翻す即ち五部律なりよりのパー  
 ラーヲカンパーラーヲカン譯云波羅市迦波羅市迦二にのパーチツテヤンパーチツテヤン譯云波逸底波逸底三にのマハーワツ  
 ガンマハーワツガン譯云大聚大聚四にはチウラワツガンチウラワツガン譯云小聚小聚五にはハリワランハリワラン譯  
 云次第次第是あり  
 蓋し南方小乘の三藏經の皆波利語を以て記載し其卷目の數多ありと

雖之を要するに「チャツッパリヤ、サツチヤ」(譯云「四聖諦」)を以て宗趣となし  
「チャツッパリヤ」(譯云「四果」)を以て證果となす四聖諦とい何ぞや一に  
「マユツカン」(譯云「苦」)二より「サムツダヤン」(譯云「集」)三より「ニローダヤン」(譯云「滅」)  
四に「マツカン」(譯云「道」)夫れ一切有爲の心行常に無常患累の爲め  
逼惱せらるゝ者之と苦と云ひ見思の二惑と善惡の兩業と俱に生死を  
招集する者之と集と云ひ前の苦集を滅して偏眞の理を顯はる者之を  
滅と云ひ正道及び助道相ひ助けて能く涅槃に到る者之を道と云ふ此  
四諦の斷惑證理因果の法門あり次は四果とい何ぞや一に「ソーター  
パッチ」(云「須陀洹」)二より「サカダーガミ」(云「斯陀含」)三に「アナーガ  
ミ」(云「阿那含」)四に「アラハッタ」(云「阿羅漢」)是なり云く須陀洹此に  
預流と翻す聖道の法流に預り入るの義なり又の逆流と云ふ生死の流  
をよ逆ふ義なり云く斯陀含此よは一來と翻す此命終りて一たび天上

に往き一たび人間に来るの義なり曰く阿那含此よは不來と翻す此命  
終りて天上に往生し再び下界に来らざるの義なり云く阿羅漢此に  
無賊と翻す見思の煩惱を斷盡するの義なり又不生と云ふ分段の生死  
を斷して後生を受けざるの義なり又應供と云ふ人天の供養を受るよ  
堪へざるを以ての故なり四果の義略して是れ如し而して第一の者を  
見道の位と云ひ第二第三の者を修道の位と云ひ第四の者を無學の位  
と云ふ其見理破惑の次序の詳かゝる經論に就て究めんとを要す  
南方小乗佛教の信徒が道德の標準とする所の之を約して「テラタナン」(譯  
云「三寶」)「パンチャ、シーラン」(譯云「五戒」)となす而して三寶とい所謂佛  
法僧三寶の四義あり云く一體云く理體云く化相云く住持具さる經論を見ゆに  
して今の翻邪歸正の三寶を云ふ其意如何ん我等無始以來善惡を盲ひて  
因果の理を辨へず邪見の法を信して遠て三寶を毀謗す今や善知識の

教導に依て邪と離へして正に歸し深く因果を信じ永く三寶に歸依して敢て餘の邪見の法も赴かじ便ち大恩教主釋迦牟尼如來の吾等も歸依する所の佛寶なり佛說三藏經典の吾等も歸依する所の法寶なり佛法相承の聲聞阿羅漢の吾等も歸依する所の僧寶なりと誓心決定する也今試に羅馬字を借來りて波利語三歸の原音を寫さば則ち左の如し

Buddham Saranam Gacchami, (漢譯歸依佛)

Dhammadam Saranam Gacchami (漢譯歸依法)

Sangham Saranam Gacchami (漢譯歸依僧)

若し又之を英譯するべし正さば左の如くなるべし

I take as my refuge, Buddha, (漢譯歸依佛)

I take as my refuge, his religion, (同譯歸依法)

I take as my refuge, his priests, (同譯歸依僧)

次に五戒どの何ぞ所謂不殺生不偷盜不邪淫不妄語不飲酒是なり而して戒の性質を云ひ一三四の戒の主戒にまて五の一戒の客戒あり其義悉しく律文に就て見るべし若し夫れ不殺を學得それの其行ひ自ら仁も止まり不盜を學得それの其行ひ自ら義に止まり不邪淫を學得それの其行ひ自ら禮に止まり不妄語を學得それの其行ひ自ら信に止まり不飲酒を學得それの其行ひ自ら智に止まる今亦波利語五戒の原音を寫して讀者も布施すべし

Pāṇātipātā Veramani Sikkhāpadan Samādhīyāmi (不殺生戒我れ能く之を持たん)

Adinnādāna Veramani Sikkhāpadan Samādhīyāmi (不偷盜戒我れ能く之を持たん)

Kāmesumicchācārā Veramani Sikkhāpadan Samādhīyāmi (不邪淫戒我れ能く之を持たん)

Musāvādā Veramani Sikkhāpadan Samādhīyāmi (不妄語戒我れ能く之を持たん)

Suramerayama Japamadattana Veramani Sikkāpadan Samadhiyami

(不飲酒)

戒我れ能く之を持たん

若し之を英譯にすれば亦合るに左の如くあるべし

I submit to the command which says, "Thou shalt not take away life".

I submit to the command which says, "Thou shalt not take things that are not

given thee."

I submit to the command which says, "Thou shalt not have unlawful connexion

with women".

I submit to the command which says, "Thou shalt not utter falsehood".

I submit to the command which says, "Thou shalt not drink today or any spi-

rituous liquors".

以上掲く所の三歸五戒の在俗佛教信徒が通常護持する所の戒法とす

若し出家沙門の戒法を論せし十戒二百五十戒等あり具さしに律文に就て見るべし

是より少しく本嶋佛教古今の沿革を略述して「シンハリーズ」が之に向て如何程の信仰を拂ひたるかを辨せんとす

業既上段に於て述べたる如く「シンハリーズ」第八代の主「デーウィナ」ンピヤチツサ王始て佛教を本島に興立し第一に摩訶因陀羅師が携帶せし所の佛牙真舍利の爲め「トーパーラーマ」の大塔を築き又六十八箇所の巖窟寺を建て其他莫大の土木を起して數多の殿堂伽藍を創開せり即ち法顯傳に曰く城中又佛齒精舎を起す皆七寶の作王梵行を淨修し城内の人敬信の情亦篤し其國立治以來饑饉荒亂あるとなし云々降て佛入滅後四百五十四年即ち西洋紀元前八十九年本嶋第二十世の王「ワラガンバ」第一世の朝に至て勅して五百員の高僧を「アルツイ



ハ一ヲ精舍ニ招集シ茲に本嶋に於て始て佛説三藏(經、律、論)の聖典を稽考して之を貝葉に録載せしめたり蓋し摩訶因陀羅師の初渡より此に至るまで約そ二百十余年間所謂三藏經典なる者の師資相承以音傳音にして盡く之を誦誦し未だ曾て紙帛に騰寫せざりしありと云ふ  
因に記す是より先き佛説三藏聖經の天竺に於て三たび結經の大集會を経たり即ち第一の結經の佛入滅後の時よして恰も西洋紀元前五百四十三年に當る「アジャータサッタ」王(即ち阿闍世王)の朝「ラーマヤガヘー」譯云王舍城の集會なり之と與かる遺法の高弟其數五百員「マハーカツシヤパ」大迦葉尊者を推して上座とあり「アーナンダ」阿難陀尊者の經を誦し「ウパーリ」優婆離尊者の律を誦せしと云ふ「第二の結經の佛入滅後百年即ち西洋紀元前四百四十三年に當る「カーラーアン」王(迦羅阿輪迦王)の朝「ウエーサーリ」毘舍利城の集會なり之に參

する清衆七百員而して「レリツタ」利波多尊者其上首たりき「第三の結經の佛入滅後二百餘年即ち西洋紀元前三百九年に當る「マンマアツ」王(有名なる檀摩阿育王)の朝「バータリプッタラ」波叱梨那城の集會なり茲に列ある大比丘一千人而して「テツサ」提舍尊者之が首座たり之を有名なる佛教三回の結經大會と稱す是より佛入滅後五百八十余年即ち西洋紀元後四十年「カニシカ」王(迦賦色迦王)の朝に至りて更に三藏檢經の大會あり而して學士「ハウントル」氏の言に依るに此「カニシカ」王の朝に校閱せし所の三藏の北方佛教の原本として西藏「カニシカ」王の朝に流通せりと云へり今本嶋「ワラガンバフ」王の朝に結集せし者は是れ彼の「マンマアツ」王の時「バータリプッタラ」城に於て考照せし所の三藏聖典ありと云ふ又西洋紀元後六百三十四年「シラーティタ」戸羅阿迭多王の世に至て大乘小乗の争ひ起り各

と異見を立てたりと印土史に見えたり

「ワラガンハ」王の又大に財帑を散して嶋中著名なる「タンブツラ」精舎及び數多の大刹名藍と創建せり中に就き「アハヤギリ」譯云無畏山大塔の如き其高さ四百「フイート」ありしと云へり今の唯々塔の外壁のみ蔓草深き處に斷續して殘存せる者凡そ一英里許あり亦以て昔時の壯觀を想像すべし即ち法顯傳に云く塔邊復た一僧伽藍を起す無畏山と名く五千僧あり一佛殿と起す金銀尅鏤悉く衆寶を以てす中に一青玉像あり高さ三丈許云々夫より西曆二百九年「ワナテッサ」王の世に至て「アハヤギリ」精舎の僧徒が「ウイトリヤ」と呼ぶ異宗を唱へ別派を建立したりしかとも其異宗の經文書籍ハ爾後卅年を経て盡く燒棄せられたりと云ふ次て佛入滅後八百十八年(西曆二百七十五年)に及びて嶋王「マハーセーナ」又彼の異宗派の僧徒に誘はれて自ら其異宗に改轉し舊

來正傳の僧徒を遇すると極めて殘酷會て前朝の諸王の正傳の寺門に寄附せし所の莊田施物を奪て數多の僧徒を餓死せしめ加之當時有名  
の銅作大佛殿并三百六十三箇所の大寺名藍を破壊しより然るも此  
王晩年及びて大に前過を悔悟し再ひ正傳の佛教を歸向して先きよ  
自ら毀却せし所の數多の寺觀を復興し別に「アマラーマ」洲に於て  
廣大なる「ゼータワナアラーマ」寺(昔多林)を新建せり爾後西曆四百年  
代に於て「ブツマゴーサ」(佛陀瞿薩尊者)と稱する傑僧印土より來て大に  
佛教を振作す本嶋三藏聖典の注解なる「アツタカター」と稱する大著作  
の如き多く師の手を以て波利語に譯述せり又次て西曆五百年代に至  
て高僧「マハーナーマ」(大名尊者)出て本嶋第一の歴史ある「マハーワ  
ン」を著作する等内名僧碩徳の相踵て輩出するあり外に護法國王の  
法城を扶樹するありて佛化嶋内ふ洽ねかりしと云ふ夫より佛入滅後

千二百二十三年即ち西暦六百八十年「アンハヘツラシタカラ」王位に即くに及びて佛教中又ハ異端の宗派を生じて諸説紛々より降て西暦千二百十九年又暨て「マラバル」の大將「マーガ」なる者大兵を卒ひて王城を襲撃するに當てや跳梁猖獗到る所に寺觀殿堂を顛覆し得るに任せて梵卷貝軸を火棄す王城ハ灰燼と變して平野亦た寸青をだも留めざる又至るり然るも爾後西暦千二百四十年「ウイジャ、ハフ」王の朝に於てハ戰乱漸く鎮まり佛教復た振ふ更に西暦千五百八十一年「ラーシヤシンハ」第一世王ハ自ら婆羅門教又改宗して痛く佛教を排斥し乃ち無罪の僧徒を捕へて生イキなぐら之ヲ抗ニし所在の佛經を執て裂て又之を火にす昔し漢土に於て二宗三武の排佛と云ふも恐くハ此「ラーシヤシンハ」第一世の狂暴に如りざるべし蓋し本嶋佛教の墮敗此時より甚しきハなるりしと云ふ然るも此王に次て位に即きし王を「ウイマラマル

マ」と云ふ深く佛教を信じ銳意して前廢を興し或る高僧を「アツラカン」國より延請して一旦滅絶したる所の沙門の戒統を繼傳せり是より更に西暦千六百三十四年「ラーシヤシンハ」第二世の朝に際して國家多難此王在位五十年の間久しく葡國ポルトガルと葛藤を生じ兵禍結びて解けず屢々和蘭兵の應援を借て之と抗敵するに及びて内外騷擾人心恟々として亦た宗教の弛張如何を顧るの暇なし西暦千七百三十九年又及びて幸ふ國家小康民力纒か又伸ふ是に於て嶋王「スリーウイシヤラシヤシンハ」禮を厚ふして數名の專使を暹羅國シヤムに遣はし其の國の善知識を請し業既ハ湮沒せる比丘の戒脈を傳へ佛教と中興せんことを乞はしむ斯くて專使の一行日を経て本島に復命するの途次海上不幸にして颶風の船を覆へすに逢ひ一行皆沒溺す只餘す所の一士二僕とのミ此危急を出て讒かに數卷の經文を携へ本嶋に還るとを得たり尋いて西暦千七

百四十五年「キルツチスリー」王更に十數輩の沙彌僧と「モダリアル」とを派遣して暹羅國に留學せしめたり而して彼等が全く傳戒の目的を達して後ち同國勅遣の戒師十三人の大徳と與に本嶋に歸寧したるに實に是西曆千七百五十三年八月あり而して彼の十三人の傳戒師の本嶋に留錫すると六年終ふ本國に還り去れり是現今本嶋に於ける暹羅派佛教傳來の梗概なり後ち復た西曆千八百一年に於て嶋中或る部分の有志者戒統を緬甸國より傳來しけき之を本嶋に於ける緬甸派の佛教となす是の如く二派各々其出處を異なすと雖元是れ所依の佛說三藏經典を同ふし安心立命の大義を一にするが故に彼此優劣なく共ニ南方小乗の佛教として今尙盛んに本嶋に行はる抑も此ニ「シンハリーズ」種族の今の印土人と同く其元と「アリアン」人種にして上古より於ての世界第一文化の民として稱揚せられたり即ち「ア

リアン」人種の西洋紀元前凡る三千年の古より在て中央亞細亞洲に勃興し漸次北中印土より南方印土を占領し太古の土人を驅逐して終に全印土の主とされり「アリアン」人種の言語と所謂梵語として語音優美文辭雅麗彼の希臘羅匈等の語と稍々相ひ似たる所ありと云ふ今「シンハリーズ」語と稱する者も元と梵語より轉訛し來れる者なりとの泰西學士等の考論なるが本嶋の又古來佛教旺盛の地なるが故に南方佛教三藏經の原語たる波利語即ち摩訶陀國の方言も多く此「シンハリーズ」語の中より滲入するが如し若し梵語と波利語とを以て藍と水とに喩へば「シンハリーズ」語の其青且つ冰ある者なる乎而して右の三種の語勢は頗る近似して互に表裡するを覺ふ先づ其一二の的例を擧げんに涅槃と云ふ原語の如き梵ニ之を「ニルヴァーナ」と云ひ波ニ之を「ニッパーナ」と云ひ「シンハリーズ」之を「ニワン」と云ふ又佛陀と云ふ原語の如き梵ニ之を「ブ

ツマと云ひ波に之を「プツマ」と云ひ「シンハリイヌ」之を「アドユン」と云ふ  
又三藏と云ふ原語の梵<sup>マ</sup>之を「トリイピタカ」と云ひ波<sup>マ</sup>之を「テピタカ」  
と云ひ「シンハリイヌ」之を「トンピタカ」と云ふ是の如きの類例一々枚舉  
に違わらず

古來「シンハリイヌ」の貴重の腦力を費して盛り<sup>マ</sup>研究せし所の學問の  
當時印土に於て流行せし所の所謂四知五明の學術なり今試に其名義  
を辨せん即ち四知と一に「壽知二に「祠知三に「平知四に「術知  
是あり凡そ生と衛り性と養ふ之を壽知と云ひ享祀祈禱する之を祠知  
と云ひ禮儀占卜兵法軍陣之を平知と云ひ異能技數禁呪醫方之を術知  
と云ふ五明と一に「聲明二に「巧明三に「醫方明四に「因明五に  
の内明是なり音韻を明らかにめ文法を正ふし字を訓し語を釋す之を聲明  
と云ひ技術機關天文地理一切致知格物の巧知を發達する之を巧明と

云ひ藥石針艾診斷治療生を衛り病と除く之を醫方明と云ひ邪正を考  
定し眞偽を究覈して一切の論理を明拆する之を因明と云ひ原因結果  
の大法に由て巨細の眞理を發見する之を内明と云ふ此等四知五明の  
學目の方今文明世界百般學術の基礎を形づくりたる者にして今より  
殆んど三千年以上の印土人の早く此等の學問を發明したるを以て見  
るも上古の印土の燦然たる文明國ありしと蓋し疑ふ可くもあわざる  
也

第二「タミルズ」八種の本嶋に於て第二の多數を占むる住民にして其數  
六十八万七千二百餘人あり嶋中東の「パッタカロー」の地方より北の「シ  
ヤフナ」の地方を合西「フットラム」の海岸に至るまで盡く此人種の居住  
する所ありとす此人種の言語の梵語<sup>サンスクリット</sup>より出でたるふもあらず亦た波  
利より變じたるにもあらず南方印土數種の言語中梵語に亞で雅致あ

る詞にして其使用の區域も亦甚だ廣いと云ふ然れども此「タミル」語を以て記載したる完全なる歴史之を以て此人種の出處沿革を詳めよする由しなしと雖且く此人種の傳説に従ふ時の「タミル」の最も古く南方印土より來て第一に本島に移住せる者なりと云へり而して此人種も所謂四姓の「カスト」ある者ありて社交の背觸甚だ嚴に四姓又數多の種姓を生して職業を分つと「シンハリーズ」と大同小異なり今煩きを厭ひて茲に擧げず「タミル」の概して勇進敢爲の氣象に富み能く艱苦堪へ多く商業に従事す本嶋に於て需用の最も多量ある棉布米穀質典等の營業殆ど此人種の專有に歸したりと云も可なり

「タミル」の男粧は白地の棉布を以て腰下を纏ひ或は身は單表衣を着け又單に肩巾のみを掛くるあり頭の深く兩鬢を剃りて聊か結髻を頂上より冠るに「トンバル」と稱する頭巾を以てす双耳に金銀の穿環を

懸く經二三寸耳朶より垂れて肩に至る貧賤の者の上半身常は裸体あり又其女裝は棉布或は絹帛の一段を以て其壹分を腰に捲き垂きて足に至らしめ又其一分は綽約身に纏ひ延て頭上を過こし又折れて寛く後ろに垂をしむ頭髮の一處に拘束して結根腦後にあり頸に頭環を掛け鼻の鼻環を穿ち耳に耳環を着く其外兩臂手足みな金銀珠玉の環珮ありて其容貌太た奇なり

「タミル」八種の奉する宗教の即ち婆羅門諸教にして其信徒の凡そ五十萬三千六百餘人許なりと云ふ抑も婆羅門教の其本を論すれば獨神教にして其末に就て之を見れば多神教或は万神教とるも似たり而して其所説も婆羅門教諸派に就て多小の相違ありと雖今且く「ヴェダ」並に「マナバタル」等の經典にある所の説を略述すれば凡そ天地山河草木國土有情非情一切万物の皆を婆羅門神の至神至聖至靈至妙なる眞

躰より發して無量無邊複雜差別の境界とあり生住異滅變更又變更し  
 て遂に一物の常住する者あるとなし是れ他なし万物己に婆羅門神の  
 聖體を遠離して各々罪惡を重ねるが故あり凡そ窒礙的れ物體の皆あ  
 靈魂の獄舎なり万物己に造罪の因縁に依るが故に靈魂遠く梵天の淨  
 欲を去り此不淨汚穢の獄舎に挫折せられて永苦身を圍み輪廻止むと  
 なし是故に若し人清淨不穢の本源に還り婆羅門神の聖體と齊しら  
 んとを欲せば應さる須らく其身の情欲を殺し盡さんとを要すへし情  
 欲と殺さんと欲せば亦須らく物体の獄舎を毀ち盡さんとを要すべし  
 是れ婆羅門教者が偏る身體を苦めて以て功德勝行となす所以なり其  
 理是の如し然るに迷信妄執の徒に至りては自ら神像靈車の下に轢死  
 して人間の罪惡を懺悔せりとなす者あり又自ら洹河に投身して鱈魚  
 の腸を肥やし以て梵天に登遐ととなす者あり或は最愛の子女を天神

の犠牲を供し或は可憐の妻孥をして大火聚の中へ焼かきしめ以て神  
 に承け天に事ふとあす如き其殘忍尅剝の妄習の聞者をして惻然とし  
 て痛み悚然として怕れしむ  
 夫れ然り唯其弊習殘害の形跡のみを見て以て直に速了する時の印土  
 人ほど愚妄に婆羅門教ほど野蠻ある者の凡る世界に之なかるべしと  
 雖決して然るにあらず即ち婆羅門の神學より彼の「ヴェダ」と稱する四  
 部の經典所謂リグヴェダ。ヤジュルヴェダ。サマヴェダ。アタルバヴェダ。  
 ありて梵文流麗に經意高妙あり又其性學より「ヴァイシセーカ」(勝論師)  
 派「サンキヤー」(數論師)派「ヨーガ」(瑜迦師)派「ヴェマンタ」(韋陀論師)派「ニヤ  
 ヤ」(尼健論師)派等其餘九十六種の性學師あり是等の皆な婆羅門教徒よ  
 因て發達せられたる者なり現今印土の住民を二億五千万として其内  
 一億八千万許の人民の盡く婆羅門教徒ありと云へば其勢力の熾んな

ると推して知るべき也

第三「ホルトゲス」人種の嶋中到處大小の市街に住居し中に就て「コロムボ」及び「ジャフナ」の地方を多しとす此人種のみ員數の未だ之を詳かにせざと雖次の「ゲッチ」人種を合せて凡ら一万八千許も之あるべし而して今茲に「ホルトゲス」と稱する者の歐洲葡萄牙の男子と本島土着の婦人との間より産出せし所の後裔を謂ふ此等「ホルトゲス」の顔色の黄色にもあらず白色にもあらず一種暗淡たる面皮にして肌膚光澤なし其服飾帽履等の一般歐洲風と相異あるとなし但し醜惡なるのみ「ホルトゲス」の性質の陋劣ありて而かも高慢に無學にして懶惰なるが故に現に志を官途に伸るとを得ず亦業も農商も従ふと能はず徒食無頼倍々貧窶に陥り大に他の人種の忌憚する所となれり現今此人種の裁縫造靴等の職業或は市場の看守も服従して緩かに其口を糊するに過ぎず

原ぬるも今より四百餘年前より在りての歐洲の商船として直に本島へ來航せし者の絶えて之なかりし夫れ葡萄牙は是れ歐洲大陸の南西に位する一小國なりしとも拘はらず其人民の夙も航海に熟練し通商も伶俐なるを以て博く世界に開こはたり即ち西暦千四百十五年の頃なりけん葡國の王「ジョアン」第一世の子「ヘンリー」なる者あり資性堅忍にして大志あり兼て星學地學に通曉し常か謂らく亞非利加洲の南岸を廻りて航海する時の必ず東印土の諸邦に達するとを得べしとて屢々練達の水手を發遣して其の探見を試みたれども皆志を果さずして空しく歸國せり斯くて又「コンサレス」サルコト「クリスタンハスト」の二人あり「ヘンリー」に誓て亞非利加海を航し其發見を力めたりしが不幸として洋中颶風の窘むる所となり辛ふして一死を免るゝとを得て亦空しく歸り來れり後ち西暦千四百八十六年より及んで葡王「ジョアン」第二世



先人の遺志を紹き勇敢なる水手「バルトレメウス、デアズ」に命じて更に  
 亞非利加の南岸に航行せしめたりしが亦復た暴風激浪に遇着し痛く  
 船衆の進航を難責する所とあり枉けて「リスボン」に回船するの止むを  
 得ざるに逢へり然れども「ジョン」第二世の堅く此行程を航すれば必ず  
 印土に到達すべしと信じ彼の「デアズ」が亞非利加南岸の一岬を呼んで  
 激浪岬と名けたるを改め殊に喜望峰の稱を下して却て増々望を印土  
 の通商に属したり

爾後西暦千四百九十七年に於て「ヴワスコ、デー、ガマ」なる者あり葡王  
 「イマニニール」の命を稟けて更ニ印土の航路を開かんと企て堅艦四隻  
 と繕ひ舟手百七十人を載せて亞非利加の南端を進航し海程十ヶ月の  
 永きを経て漸くおして今の「カルカッタ」府の對面なる「マラバル」の海岸  
 に到着しけり是を葡人が印土に開航したる破天荒となす此時「ヴワス

コー、デー、ガマ」の頗る印土人の優遇を受け數多の珍寶貨物を搭載して  
 成功衣錦揚々として本國「リスボン」府に歸省するや舉府の市民恰らも  
 狂するが如く拍掌喝采を以て「ヴワスコ、デー、ガマ」を歓迎したりしと  
 云ふ實は是れ西洋紀元千四百九十九年のこととして有名なる「コロムバ  
 ス」が西半球の新世界を發見したる時代と暗合せり東西交通の開くる  
 機運も亦時ある哉

爾後葡國の商船相繼て印土に航し遂に各處の植民地を領するに至れ  
 り西暦千五百五年に印土葡國植民地の總督「フランシスコ、デー、アルメ  
 ーダ」の子「ローレンス」なる者偶々海賊を逐ひて「マルディブ」島を過ぐる  
 の際其船旋風に吹き流さる料らずも本島「ガール」府の港内に漂着しけ  
 り是れ葡人本島に到るの初發にして是より先き島民未だ曾て歐洲の  
 人物風俗に慣をす乃ち閩港愕いて相傳へて曰く昨新到の異人知らず

何國の種族あるとを雪面碧眸威ありて且つ猛し其容貌は頭も生鐵の  
 峨帽(是絨帽のみ)を冠りて毛髮皆黃金あり脚亦た精鋼の長靴是革鞋の  
 み)を穿ちて淵歩健武す其勇雄豈に驚悸せざらんや彼等の時々拳大の  
 砥塊を食ひ(麵麩のみ)或は生物の暖血を啜る(是葡萄酒のみ)卓上幾箇の  
 首級あり(是牛骨猪頭のみ)匕箸に代るも利刀を以てす(是家常のみ)其慘  
 酷豈に驚悸せざらんや彼等の各々一挺の雷銃を提ぐ等閑に捺着すれ  
 ば電捲き星走り飛丸能く哩外の鐵壁を射透す其奇器巧術豈お復た驚  
 悸せざらんやと犬吠猿唱虚實交々傳へて島王「ダルマブラクラマバフ」  
 の聰聽又達す王忽ち驚悸して俄かに臣僚諸司と會して問て曰く仄か  
 り聽く外來の強狄我が海港に迫ると太だ切なりと我れ預め戦和孰れ  
 の備へずんばわらず而して彼れの舉動に於て順逆何れの點もあるや  
 未だ輒すく端倪す可らず將た之を如何せば可ならん乎と衆議區々に

して利害の論未だ定まらず時に地方長官の一人「チャツクラ」なる者坐  
 を進みて王も對て曰く諸公の論は是畫餅のみ何ぞ飢に充つるに足ら  
 ん徒ら又席上の閑談を打して日を曠ふし時を移さば好機或は逸せん  
 如かず臣自ら往て親しく彼れの事態を探知し來らんよと王即ち之  
 を允す「チャツクラ」直に「カール」も赴き葡人の動靜を視察して還て王に  
 奏して曰く葡人の歐洲近代の富強なる者我が貧弱を以て彼も抗せん  
 と欲せば螳螂の龍車に於けるも奮ならず王寧ろ速かよ彼れと結托し  
 て徐らよ善後の得策を謀れと王即ち喜びて之も從ふ是より遂に葡國  
 と好を通じ同盟の契を結ぶに至り次で西暦千五百三十四年「ダルマ  
 ブラクラマバフ」王の嗣「ブワチーカバフ」第七世が其弟「マードンナ  
 イ」と隙を開き兵を搆ふるに至りて王其の嫡子を葡國に送りて後事を委  
 托したり於是西暦千五百四十一年「リスボン」府に於て右の王子に「ロー

マンカグリック<sup>ノ</sup>宗の洗禮を受けしめ名を「ドン・ジョアン」と命せり是先つ  
 葡人が本島を窺察して自ら爲めにせんとするの第一着手あり後ち「ブ  
 ワチーカバフ」王没するに及びて後董の争ひ起る葡人即ち彼の王子「ド  
 ン・ジヤン」を擁して入て錫崙の王位を襲しめ之に托して遂に島内沿海  
 の要地を占領して本島第二の政府即ち葡國政廳を設立して苛法と兵  
 力を以て島民を恐嚇し剩さへ「ローマンカグリック」宗を弘めて強ひ  
 て島民信教の自由を束縛したり現今本島に於ける葡人の零落窮耗の  
 葡人自ら招く者にして亦之を積不善の餘殃と云ふも不可なきが如し  
 而して目下島内耶蘇教の信徒の新舊兩派を合して約そ二十六万七千  
 九百餘人許なりと云  
 第四「メユチ」即ち荷蘭人種<sup>オランダ</sup>の亦た葡人と齊しく本島住民の内に加へら  
 るると雖今の其數次第に減少すと云へり此人種ハ元來荷蘭國東印土

會社に屬せし文武士官の子孫として漸次本島に移住せし者あり方今  
 と雖此人種の英政府の信用を失はずして法廳其他の官吏或ハ筆生と  
 あり又或ハ種々の商社に従事して生活風俗尙は歐洲人種たるの資格  
 を失はず本嶋九流の種族中於て上流の地位を占むる者なり  
 夫れ荷蘭の歐洲英國に隣りたる小國ありと雖近古海軍の盛んになると  
 歐洲諸強國をして屢々後へ又睽若たらしめるとあり又蘭人が始めて  
 通商を印土に企てざるハ蓋し西曆千五百九十四年の頃ありしが當時  
 蘭人「バレンス」ある者北方氷海より印土及び支那に航せんと欲して其  
 目的を達すると能はず同千五百九十五年に於てハ蘭人始て喜望峰を  
 廻航し來て遠く「ジャワ」<sup>マダガスカル</sup>「スバイス」<sup>スバール</sup>及び支那等の各所へ向て荷蘭の  
 商旗を翻へしより次で同千六百二年三月荷蘭の水師提督「スピルバ  
 ケン」なる者三隻の艦隊を將ゐ來て本島「バツチカロ」の海岸に投錨せ

り時維き島王「ウイマラダルマ」の治世にして之を荷蘭來島ノ嚆矢とす  
爾後同千六百三十六年「ライジャシン」ハ第二世位に即くよ及びて王ハ  
葡人の専横を怒りて百方之を驅逐せんと欲し屢々荷蘭の援兵を借り  
て葡人と交戦したりしかども是所謂前門の猛虎を防きて却て後門の  
豺狼を進めたるど一般遂に同千六百五十六年よ至て全島海岸より三  
十英里以内の地の四隅共よ蘭人の割據する所となり政廳を設け鎮台  
を置き是より亦た嶋王の指呼を受けず傲然治外に獨立して先きの葡  
人よ代はり嶋中又第二の新政府を現出せり  
元來荷蘭人は熱心なる「プロテスタント」宗の信徒なりければ其之を本  
島よ傳播せんと試むるや甚しき恐嚇と壓制との手段と用て人民よ逼  
り先づ領内に到處に簡易なる小學校を設けて子弟を教育すると同時に  
新教の宗旨よ引入れ若し其父兄よして之を拒む者ある時の嚴に罰錢

を課し學校即ち新教の寺院にして寺院或ハ官衙たり是故に當時本島  
よ於ける新教の牧師と忽よして僧侶より忽よして教員たり復た忽よ  
して官吏たり政權と教權とを互用して威すに似て復た慰むるが如し  
勢ハ是の如くされば足一たび學校の門を踏む者には必ず強ひて新教  
の洗禮と受けしめ又た新教の誓式よ從て婚姻を結ばしむ敢て當人の  
信非信を問えず若し夫れ新教信者よあらざれば荷蘭政廳の下に奉仕  
すをとを得す又土地を借用するを得さらしめより已よ然り荷も荷  
蘭の領地よ住居して農商を營さんとする者官途に就職せんとする者  
に論あく問々僥倖を萬一よ希圖し媚を蘭人に賣らんとする輩は先き  
に一たび止むとを得す「ローマンカソリック」宗に於て宣誓したるをも  
願みせ忽ち伴りて「プロテスタント」宗の洗禮と受け恬として己れよ耻  
ぢず以て荷蘭政廳の意を邀ふるに至れり徳義の腐敗せる人民の特操

なき一に笑ふ此に至る是ど今日本嶋亡國の前兆あると知らきたり  
斯くて亦た荷蘭政廳の酷法を濫作して「ローマンガリック」の僧徒を  
凌轢すると恰も壯夫は濕薪を束ぬるが如く又已に舊教の禮に依て葬  
りし所の死者の墳墓を發いて新教を改葬せしめ或は舊教の式を以て  
嫁娶せし所の夫妻をして妄に離婚せしめざる等荷蘭政廳は力を極め  
て舊教を排擠し其痕を島内に絶しめんと企てたるの實に乱暴の措置  
にして政教混濫の甚しき者と云ふへし當時舊教の信徒にして荷蘭の  
虐政を避けて陰か「カンデー」山中の「ランウェツラ」洞を遁竄せし者七  
百人現今「マータラ」の接地なる「ワハコツタ」村に住する葡人の其避難者  
の子孫なりと云ふ以て荷蘭新教徒の暴戾と證すべき也

第五「マレー」人種の元と「マラツカ」「スマタラ」及び「ジャワ」等の各處より來  
て本嶋に移住せし者あり而して其數僅るゝ八千八百九十餘人許なり

彼の輩の顔貌の銅色にして區額廣險低鼻鈴眼外貌鹿野なり此人種の  
英領以來本嶋の士兵に編入せられ若くは行商に従事す衣服の「シンハ  
リーズ」の細民と稍同じく或は長袖の表衣を着る頭の蓬髮の者と髡禿  
の者と區々にして一様あらざ間々紅棉を束ねて頭帽に充つ「マレー」人  
の脊力ありて剛猛に掉臂横行傍ら人あきが如きの風あり而して其宗  
教の一定しざる者あるとなし

第六「チャフル」人種の亦曾て本嶋士兵の一部に加へられたり元來此人  
種の荷蘭人に伴はれて亞非利加の喜望峯に近傍より本嶋へ移住せし  
者なりしが後ち英國本嶋を領するに及びて増々其移住を勵まし今の  
本島住民の一部を形づくるに至れり此人種の一般に葡萄牙の言語を  
使用すれども其宗旨の「プロテスタント」教を奉ず彼輩の面目の唇厚く  
臉顴ち頭髮縮縮して其形毛球の如く眼光炯々として人を射る衣服の

鹿造なる短衣と股引の種類よしして露頭跣脚鐵鑠として克く熱地に堪ゆる者の如し

第七「ムール」人種ハ其數十八万四千五百人餘よしして島中各處ニ散居し中に就キ「コロムボ」の接地「マラマン」と稱する處ハ此人種輻輳の地ナリ原ぬるニ西曆十一世紀より十二世紀の間「アッヒヤ」阿刺伯人の早くも南印土諸方に往いて貿易に従事し多く其利を壟斷したりしが西曆千五百五十四年の頃「モゴル」王印土を併呑するに當て彼の亞刺比人の盡く其財貨を強奪せられ流離顛沛四方に漂泊するとのみされり今島中の「ムール」人種ハ其阿刺伯人の後裔ありと云ふ此人種の容貌ハ大抵禿頭ホシテ鬚髯有る無し而して頭ニ黃赤交織の頂骨帽を戴き足ハ鐵筭を以て吾國俗の所謂鼻緒に代用したる質朴なる木履を穿き或ハ鶴嘴形の異様なる革靴を用ゆ然れども平時ハ土足跣行する者も亦多し「ムール」

「ムール」人種ハ概ね無學不文惟利惟征し行商を業として更に危險を顧みず尤も厭ふべきハ此人種が男尊女卑の甚しきとあり荷も「ムール」婦女たる者の伴出なくして獨り廣人稠衆の間に行くことを許さず但希れに回教寺院に詣ずるとあるも面巾を以て密に其顔を掩ひ細く雙眼のミを露ハす假令幼少の女兒と雖白日戶外ニ游戲すると鮮なし大に支那の風俗ニ類ス況や又此人種には一夫數婦を養ふの陋風甚だ熾んにして早婚の弊も亦頗る多し「ムール」の一般に回々教を奉じて曾て他教に入らず方今島中ニ於て其信徒ハ約そ十九萬七千七百餘人ありと云へり

第八「ウエツド」人種ハ其數二千二百餘人よしして舊都「カンデー」の東面なる深山幽谷の裡に栖息して殆ど世と杜絶す傳へ道ふ是れ「シンハリ」ズ「第一世王」ウイシャ「ヨ」の先妻「クウエー」ニの腹出なる子女の後裔

が此處に遁れ來て永住せし者ありと其信教の何ある者も屬するや未  
 ぶ之を詳かにせし人なし言語の種「シンハリ」又似たる所ありと雖  
 亦別よ一種の語法を存せと云ふ予面たり此人種に接しよるとなし今  
 且く英國宣教師「ゼームス、セルキルク」氏の言よ因るに「ウエツド」容貌愧  
 偉よして此髪深く顔を覆ひ蓬髮卓豎或は木葉を綴て裙よ作り之を腰  
 部に纏ふ者あり或は全身赤露よして一片の衣物なき者あり「ウエツド」  
 文字を知らせ性射技に巧みなり枝を矯めて弓となし用て狩獵を事と  
 す食の皆を動物の生肉并に天産の果實居は是を岩間野穴素より常樞  
 を定めず彼等若し斧刀器具の要すべき者ある時其形容を以て木葉  
 に描寫して夜に乗じて接近の村落に赴き之を路傍の行人繁き處よ掲  
 示し且つ彼等が手獲の象牙、山蠟、蜂蜜を其下よ措て去る蓋し此を以て  
 彼れに易へんことを賄すなり村人明旦見て「ウエツド」が所需の意を解し

彼を取て此を給し去れば「ウエツド」亦夜陰其物件を持ち還るを例とせ  
 と云ふ此人種の遠く「シンハリ」王の朝より以來葡萄牙の渡來荷蘭  
 の占領を経て方今英吉利の本島を支配するよ至るまで其間二千四百  
 有餘年の久しき自ら壺中の天地を作りて迥然世外よ彷彿し恬淡真率  
 所謂時の榮辱窮達治亂興亡の何者たるを知らずして尙今日に生息し  
 つよあるの寔よ奇と云ふべし葛天子の民か將た無懷氏の民の思ふに  
 我國の「アイノ」人種よりモ一層簡朴なる者なるべし  
 第九「ロディアス」人種ハ退放人と稱して本島住民中最下の種族なり他  
 の人種之と相ひ齒すると避く是故に「ロディアス」の多く内部の山邊  
 に住して一の「ロディアス」村落を作る此人種性質獷惡よして掠奪を事  
 とする者あり男女別なく犯姦不法其禽獸を去ると遠のらず政府も之  
 を度外に放任し曾て管理する所あかりしも近代に至り耶蘇宣教師の

手を假りて徐々之を提攜教化せしむと云ふ

以上列擧する所の九流の種族の英政府之を総稱して錫崙土着の住民と云す而して此九流の表に逸して最上の生活をなす者の英國人并ハ純粹の歐洲人にして其數合して四千八百五十人許ありとす

抑も英國が始て印土の貿易に注目せしハ同國王「ヘンリー」八世の頃にして遂に其目的を成就したるハ女王「エリサベス」の時あり是に先ちて當時葡萄牙人の早く既に印土諸邦と通商を開き大ニ麻利を博したりければ素より冒険敢作の氣象又富める英人の傍ら之を覘て垂涎禁すると能はせ或ハ北海よりし或ハ南海よりし屢々辛酸を喫して東洋諸邦の商狀を視察するるとどのなれり即ち西曆千五百八十九年中本島「コロムボ」港に上陸せし「ラルフ、フイツチ」なる者の其視察者の一人なりし夫より二年を経て英國ハ東洋商隊の名を以て數隻の軍艦を印土よ

發遣せしが恰かも同千五百九十二年に於て其軍艦の一なる「エドワード、ボナヴェンチエール」號ハ今の「コロン」に着港したり爾後英國ハ愈々益々印土地方の貿易を獎勵して漸次に廣大の植民地を略取し尋いで同千六百六十四年に至て島王「ライシャシン」ハ「第二世」と通商條約を結び又同千七百六十三年又植民地を求め爾後同千七百八十二年より同千七百九十五年又至るまで英人の進んで島政に干渉して蒙仁以て島民の歡心を攪り傍ら先入の荷蘭に敵して事を軒戎又訴へ鹿を中原に逐ふ終に其翌年に至て一戰の下に蘭兵を退ぞけ驟然として驥足を沿海千里の地又伸べすとを獲たり是より以來嶋王の鼎價日一日より軽く賣國の佞臣踵を接して蕭牆より起り外來呑嚙の鯤鯨鬣を振て閨を排し隙を窺ふ當時國歩の危急存亡朽索の六龍を繫くハ於けるも啻あらず果然として西曆千七百九十八年舉嶋みな英國の掌握に落ちて



漂として一箇の菴摩羅果の如し是より亦山川顔色なく日月亡國の民を照さず嗟吁  
 予曩きも錫崙に遊びて留ると僅々三年なりしが其間亦益友に乏しう  
 らす梵僧あり歐客あり官吏あり平民あり皆以て世出世の知識を琢磨  
 すべし漁の漁夫も訟ひ農の農叟に質す必しも常師を要せざるなり然  
 るに談偶々英國の屬地政略に及ふ時の交友動もそれば云ふ英國の施  
 政の苛酷あり陰險なり今女皇ヴィクトリヤ立治以來僅々五十餘年間  
 にして英領印土住民の餓死する者五百有餘萬人あり是れ英政収斂の  
 結果なりと若し三人茲に頭を聚れん衆口一舌英政府の非政を批難す  
 る者の如し然れども其愁訴する所の業既に世の義士仁人が飽まで英  
 國の屬地政略と讒譏痛論したる糟粕のみよして新に耳朶を驚かすべ  
 き者にあらざるを以て予の常も是等の人々に對しては唯果して然る

乎の一言を以て輕々も聽了せり或時一老翁あり問ひ乘して來て余が  
 客寓を叩く談復た政教の時事に及ふ予試に翁も問て曰く聞く翁頗る  
 本嶋古今の事情に通曉せりと若し今の英政を以て古への「シンハリ  
 王」の治化も對較せば其休戚果して如何うや翁乃ち眉を擦めて云く  
 難哉予が問題や凡う天下の事一物一件として利害相伴ひ禍福相半ば  
 せざる者ありあらず況や一國の爲政に於てをや又況や本嶋の如き多種  
 族雜居の人民を支配して各々其處を得せしめんとする英政の困難な  
 るに於てをや苟も惡んで其善を知り好んで其惡しきとを知るの眼な  
 くんば輒すく天下古今の事を論量す可らず老爺今年齒ひ八十氣老し  
 智消と亦喙を國事に容るゝに懶し然もとも老爺身春秋に富むを以て  
 聊の世の經驗も慣ふ子若し厭はずんば茲に些どの老婆心説を打せん  
 子夫れ本島の往時を知るや知らずや若し島王の允可を経されば一般

人民の大厦廣屋を建るとを得ず屋も窓牖を穿ち壁に白堊を塗るとと  
 得ず寢るに床なく食するに卓なき唯た露地に蹲踞し鹹上に眠臥す而  
 して今皆之に反す往時の島中金銀貨幣太た希なり是故に貿易の只物  
 を以て物に換ふ即ち米麥を以て薪漿に易ふるの類なり人家未だ倉庫  
 あり地を堀て財貨を藏す人民の食膳甚だ疎惡、良辰佳節盤魚僅か  
 箸に上る今皆之に反す往時の道路の荆棘蒸糝今の乃ち然らず坦々た  
 る修道三千英里に延長し蜿蜒たる鐵車三百英里を馳奔そ凡そ人力を  
 省き冗費を減し交通を便よし運輸を利する所の電信郵便舟車橋梁等  
 古と今と有無相反し快澁共お同じらざると世を隔て劫を異とする  
 が如し往時の島王の「ライジャ、カトラ」と稱するにあり賦役時を以てせ  
 ず酷待借すことなし今は乃ち然らず「イングリッシュ、ライジャ」英王の義  
 と雖<sup>レ</sup>直と題して雇を使ふ往時の刑罰の酸慙なり中よ就く其極刑と

云ふもの、先づ鐵板を以て緊しく罪人の五體を嵌し黒繩を以て倒に  
 懸け數輩の壯丁の煽々たる利鋒を揮て力を極めて四方より之を亂衝  
 し死跡寸段となりて地も墜つれば餓狗走り就て淋漓たる流血を踏る  
 又或と狂象をして罪囚を躍殺するの酸刑あり踏々肢節を折裂して死  
 に至らしむ是の如きの慘狀等閑に談話するも尙且つ慮礙し心戦くを  
 覺ゆ而して今の英政に是の如きの悲愴あき也夫れ鎮靜昇平の人民の  
 幸福國家の慶兆然るに本嶋の往時を回顧すれば革命騷亂相接て殆ど  
 寧歲なく其間「シンハリーズ」王にして位を廢せられし者十一人自盡せ  
 し者四人戰没せし者十三人弒逆し羅りし者二十八人上み王家の傾運  
 已に此に至る下も庶民の冤も坐し屈も陥り難に殉し飢も仆る者其  
 幾千萬人あるを知らず且つ往時嶋中「ワンチャ」と稱する地方の如き豊  
 饒第一にして天然の富庫ありしと云と雖中世久しく「シンハリーズ」と

「タミルズ」どの競戰場となりてより田園荒廢して艸木暴露し山の皆藪  
 山土の是れ焦土黍稷根と拂て盡き骸骨地も隨て堆し風晨月夕林壑之  
 が爲に怒り泉石之が爲も咽ふ天陰夜雨人をして坐ろに感古の情も堪  
 へざらしむ今の乃ち然らず英國政を擧めてより茲に殆ど一百年彗星  
 上も現せず狼烟四もに絶む野も擊壤の音を聞かすも雖年も大なる凶  
 歎あり然るも吾黨の言を好む者動もすまば便ち道ふ今の政府の外國  
 の政府なり是れ吾輩が默從するを屑とせざる所なりと或ハ其事わ  
 らん然れども且く眼と英領以前に注て見よ葡萄牙人の外人もあらざ  
 る乎荷蘭人の又外人にあらざるか更に前朝に溯りて之を考ふるも幾  
 箇の外來人たる「タミルズ」統の諸王を見出すべし豈に獨り英政府に於  
 て之を怪まんや議者又云ふ今の錫崙人に參政の權利なくして只納税  
 の義務のみありと殊に知らず現に「コロムボ」政廳の立法會議あり「シン

ハリイズ並に「タミルズ」代議士之も參與して輿論を暢述し法制を公  
 議するの倚子を占有しつゝあるもあらずや若し之を他の專制政府が  
 妄に人民の口を箝して抑壓唯治むるものよ比すれば其休戚相去ると  
 天壤も啻ならず其他「シンハリイズ」種族にして英政府の任用する所と  
 なり顯官要職にある者亦太だ尠からず今の政府ハ能を見て職を授く  
 往時の門閥主義に倣はざるあり又假令人民の代議士となり政府の官  
 吏たるを得ざる者も苟も治安を障害せざる以上の政府之に借すも  
 言論の洞開を以てし出版の自由を以てす若し夫れ正義に協ひ公道に  
 順する者ならんに政府豈に妄ふ之を屏けんや又看よ往時本嶋の文  
 學藝術の獨り佛教僧徒の專有に屬し一般人民の實に無學不識の甚ま  
 き者ありし今の乃ち然らず「コロムボ」政廳の直轄も係り或ハ其保護の  
 下に立つ所の大小の學校の其數幾十百なることを知らず即ち「ローヤル、

コーレーツ「トーマス、コーレーツ」ガール、セントラル、コーレーツ「ウェス  
 リー、コーレーツ」ジャフナ、コーレーツ「トリニチー、コーレーツ」等の共著  
 名なる者あり其他佛教専門學校靈智協會附属學校等政府保護の外に  
 獨立する者亦少ならず且つ子孫奉ぜる所の佛教の如き往時に於てハ  
 嶋王の優祐なる外護ありて頗る隆盛を極めたと同時に又暴君暗主  
 の動もすまば之を破滅するありて慧命縷の如く掛り佛日將さに光と  
 隠さんとせしと屢々なりどす是他さし往時の佛法ハ依頼主義にして  
 苟も三界大導師の遺法を以て一國君主の私する所と放任せしめられ  
 ばなり今の英政廳が嶋中の各宗教を待すると公平無私一に各宗教の  
 運動自在に任せり若し志を抱て大に爲すとあらん者の夫れ唯今日ハ  
 今日ハ實に千載一遇の好時節あり子須らく努力すべし老爺今是の如  
 く勿々に論じ去ると雖聊も已れが爲ふする所ありて媚を英政府ハ

献じ名を當世に射る者にあらず老爺ハ固より「シンハリーズ」種姓祖先  
 世々本嶋先王の恩徳を食むと尙し古を鑑み今を顧み私かハ亡國の艱  
 難を慨し亦回天の卓策を念ふと蓋し一日にわらざるなり奈何せん印  
 土諸國民の氣節次第に腐敗して自卑外崇の風俗日々長じ自國の國  
 美自國の體性自國の宗教みな躬から棄てて猥りに外來の事物に心醉  
 し唯摸倣を賢なりとし擬制を才なりとする者雷同唱和殆んど其底止  
 する所を知らざるあり  
 抑も印土の獨立を挽回するの術ハ一頓智一奇計の能く及ぶ所とあら  
 ずして廣く之ヲ籌策を講究し希望遠大を期せずんばある可らず而し  
 て印土國美中の重要ある佛教を振作して以て人民の元氣を涵養し族  
 姓の糾合を謀るハ挽回策の尤も先務なるが如し然るに現今佛教の文  
 献を中印度に求めんとするハ中印度ハ最早や杞宋の以て之を徴とす

るも足る者なし佛陀伽耶の墳墓(釋尊成道處)の長く千載の雨露に晒され正覺山前の菩提樹の轉々荒涼の悲風を動す然らば之を何處も求めて其源も逢はん乎本嶋の暹羅か將た緬甸、東瀟塞の而して此等南方の佛教の所謂小乗なるが故に今尙佛音を誦し佛服を着け佛戒を行し儀相見るべく殊勝愛すべしと雖其説く所の釋尊在鹿野苑十二年間の阿舍部に止まりて彼の華嚴も於ける法界無礙の妙理、方等に於ける彈呵斬新の説法、般若も於ける諸相非相の眞諦、法華も於ける唯一乗の極致、涅槃に於ける扶律譚常の優旨かどの未だ曾て夢よだも知らず則ち知らざるが故に南方佛教徒の動もその北方大乘の佛教を評して非佛説なり婆羅門教の一種あり印土哲學の餘派なりとまで揣摩の臆評を吐くも至る老爺曾て聞く法華經信解品に曰く即チ遺<sup>チ</sup>旁人ヲ急<sup>ニ</sup>追<sup>フ</sup>將<sup>テ</sup>遠<sup>ク</sup>送<sup>ラ</sup>シム<sup>ル</sup>窮子驚愕稱怨大喚<sup>ト</sup>是れ小乗小根の輩の自家直に是れ覺皇の嫡

子なることを忘れて遠く出て江湖に漂零し歸り來て其父の富貴尊嚴に驚き立てし嗣とせらさんとするに當て却て其父を怨み叫ぶの好譬喩なりと釋尊在世の時も於てすら小乗者の大乘者に於ける其疑訝驚愕實に是の如し況や佛滅後二千四百三十三年に今日小乗者か大乘者を嫌疑するの敢て深く咎むるに足らず又況んや大乘教なる者の現今印土諸邦に於て地を拂て亡滅し了りたるに於てをや思ふも小乗の佛教徒の自利も厚くして利他に薄く守衛に長して進略に短かり未だ以て印土獨立の先鋒と頼む可らざる未だ以て開明國民の希望を満足せしむるも足らざる是故も老爺が常に將來遠大の望を屬して已まざる者の現今貴國並に支那、朝鮮、蒙古、滿州、韃靼、西藏等の諸邦に行はるる所の大乘佛教なりとす然るに孤り怪しむ上求菩提下化衆生を以て念々不離心とする大乘佛教者其人にして守株改めず待菟營に依り各々一方の

小天地を踟躕して進みて新福田と海外を開拓するとを勉めを看よ西藏の佛教の「ヒマラヤ」山を阻隔せらるる雪に凍ゆる未開の梅花の如く芳信未だ四方を傳へらず支那の佛教の敗類せる万里の長城に圍まれて糧食を失ひたる孤軍の如く進退維谷り朝鮮の佛教の其國の運命と共に寥々として曉天の星の如く殘光明滅の間にあり唯貴國即ち日本の佛教のみありて尙空谷に蛩音を聞くの思ひあり然れども聞く貴國の佛教の宗派數十に分かれ各々藩籬を立し經界を限りて恰かも封建の舊政度の如く佛網其統一とる所なきが如しと果して然るや否や今や本嶋の愚か印土及歐洲の學者識者よして大乘佛教の獅子吼を聽かんとを樂ふ者日一日より其數を加へ彼等か渴望の大旱の雲霓に於けるも管ならず其實際の貴國を刊行する海外佛教事情の小冊子よ就て見るも其一斑を窺ひ知るべき也殊に印土人の佛教に對する感覺の

彼の歐洲人よりも層一層の熱を加へ貴國の佛教者を慕ふとの万里の異郷にある孤客が其妻子の面を見んとするが如きは他をし印土の久しく回教及び耶穌教國民族の併呑する所とあり不可思議不可商量の壓製束縛を被り髓に透り骨を徹するの艱難を喫し氣を吐き聲を呑ひの悲境に達したれり也佛教の二千四五百年前の印土よ於ける文明と懐胎し亦之を産出したる慈母にして印土「カスト」の牢獄より民權を救ひ出したる嚴父あれば也老爺の徒に杞人の憂に倣ふ者にあらず然れども印土將來獨立策の第一着手の斷して佛教を利用せんと思ふ者あり佛教を利用するより大小二乗を圓融し南北佛教を聯合して唯一佛教の運動をなさしむるに在りと思ふ者なり一佛教の運動を試みんとするの先づ南北佛教徒が交通往來の路を開き通信に視察を留學に巡教を頻々彼我の事情を

疏通し甲乙の知識を交換するより思ふ者なり老爺曾て支那春秋  
 戰國の末路の形勢を聞て大に感發せしことあり時の説客蘇秦張儀な  
 る者の何等の快人ぞや縦るも三寸の舌頭を翻へして一の合従を説き  
 一の連衡を唱へ奏と六國との形勢を指點すると恰かも一局の碁面に  
 黑白の石を排置して成敗を吸煙二三服の間決するが如し蓋し是れ  
 機に投して動く者の活伎倆元より是の如くおらずんばあらず今や時  
 あり南北の佛教を糾合して一團體とあり整々堂々の法陣を張りて以  
 て驕勝の敵國否外來の邪教を挫折し盡すべきの時あり子他日國に歸  
 らば左の言を以て廣く子び同胞兄弟に寄せよ曰く佛教に攝取折伏の  
 二門あり乞ふ兄等先づ折伏より始めよと勉旃

## 錫 崙 島 志 畢

## 錫崙島志附言

學友洪嶽宗演師客冬十二月南印度錫崙島より歸朝し余を東京駿河街  
 の僑居に訪ひる然れとも歳晚匆忙の際清談閑話に暇あらず更に他日  
 約して別る越て本年に至り余腦充血症を罹り都下の熱鬧に堪へず病  
 を鎌倉の浴舎に養ひ病間師を瑞鹿山の佛日精舎に訪ひ縦談數日に涉  
 れり於是て余師を謂て曰く師が熱帶地方に在りて辛酸苦修の狀及び  
 波利語の來由南方小乘佛教の事情粗は其要を聽くことを得たりと雖も  
 彼の印度諸州に於て佛教の眞理を奉して國教となし其民を教ふるも  
 拘りらず國を獨立の勢なく民に自由の權なく擧て英佛の羈絆を受け  
 虐政の下に呻吟せり而して師が留學せし錫崙島も亦た既に英の所屬  
 たり思ふに國の獨立を失ひ民の自由を得ざるも必ず之が原因おくん  
 べある可らず師の慧眼卓識を以て彼地に在ると三年定めて事の顛末

を悉せしあらん、幸ふ余の爲に其一斑を語れど、言未だ了とらざるに貝葉堆裏より一小冊子を出し、余に告げて云く、是れ貧道が錫崙島に在るの日、修道勉強の餘暇、彼地の風俗、人情、政治、及び宗教等、苟も眼も觸れ心に感せしものを手記せしもの也、此れ或の予の所問の一端を塞くも足らん、余受て之を讀む、上の彼地人種の起原より、下の今日英政府施政の方針に至るまで、盡して罄さるるなし、其間朝家は存亡と、佛教の盛衰と、又關して下せし評論の如き、皆な是れ適切の語、憂國の言、恰も麻姑をして癢を搔らしむるの想ひあり、謂つ可し遺憾なしと、蓋し我國現今の形勢の、聖明上に在り、賢臣輔弼の任に當り、上下一致、文運隆興の秋なり、是の亡國の史、遺民の記、固より我が國家に裨益する所なきが如しと雖ども、退て裏面の實相を觀察せば、此書に載する所、我が殷鑑とあすも足るもの、豈ふ二三にして止まらんや、遂に師に乞ひ之を剞劂に附し、世に

公にす、愛民憂國の士、護法扶宗の僧伽、此書を一讀して、計圖する所あらば、庶幾く天の未だ陰雨せざるも及んで、牖戸を綯繆するの鴻益を得ん歟、單に亡國遺民の記録視すると無くば、則ち好し、

明治二十三年三月

崙嶼子東海玄虎誌



明治廿三年四月廿八日出版御屈  
明治廿三年四月二十五日印刷

版權  
登錄

著

者

神奈川縣平民  
釋

宗

演

相摸國鎌倉郡山内村  
七十二番地居住

發

行

人

岐阜縣平民  
東海

立

虎

東京市日本橋區駿河  
町壹番地寄留

印

刷

人

東京府平民  
坂田

梅

次郎

東京市芝區神谷町  
十六番地

發

行

所

弘

教

書

院

東京市日本橋區駿河  
町壹番地

